アベリスツイス高校生派遣事業

実績報告書

Ｈ．Ｋ．

目次

1　目的

・目的、心構えの変化

2　ホストファミリー

・ホストファミリー紹介

・エピソード

3　ウェールズ

・風土

・政治

・食事

4　学校

・制度、授業

・高校生

5　平和

6　終わりに

1、目的

●目的、心構えの変化

・応募したとき　　・自分の殻が破りたい
　　・世界を広げたい
　　＋
・研修会を受けて　　・平和の大切さを伝えられるようになりたい

応募したときの私は、フランク・エバンズさんの「フ」の字も知らなかった。ただ、人の目ばかり気にして、狭い世界の中に閉じこもっている自分を変えたい一心で応募した。未来が不安で、自分に自信がなくて、とにかく何か行動を起こさなければという気持ちだった。

しかし、研修を受けるにつれ、「平和」というものについて考えるようになった。最前線で戦う兵士や、被爆で死んでいく民間の人の悲惨な現実はしばしば取り上げられる。しかし、フランク・エバンズさんのような捕虜の存在はあまり注目されることがない。私自身、今回の事業で始めて「捕虜」の過酷さを知った。過酷な労働、しかもその労働が自分達を苦しめる敵に貢献するものだなんて、肉体的にはもちろん、精神的にもとても辛いに違いない。そして、その捕虜が私達の住んでいる与謝野町でも働かされていたと知って衝撃を受けた。平和な与謝野町しか知らない私は、与謝野町が平和なのは当たり前のことのように感じていたが、それはとても幸せなことで、つい数十年前にはこの町にも捕虜がいたのだ。

だから、この**平和を守るために、しっかりと過去を見つめなければならない**。そして、アベリスツイス訪問を通して、**フランク・エバンズさんがなくなるまで願い続けた「平和」の大切さを伝えていける人間になりたい**と思うようになった。

滞在中、O君に「私、英語苦手なんだよねぇ」という話をしたら、「じゃあ、何で来たの？」と言われてしまった。確かに、O君の言うことはもっともだ。しかし、私は、ウェールズへ行く目的、もっというと**外国に行く目的は必ずしも言葉である必要はないと思う**。自分の心の中に目的意識がちゃんとあるなら、たとえ英語が苦手だってどんどん海外に出て行っていいと思う。私自身、英語は苦手だが、今回の滞在で本当に貴重なものをたくさん得ることができた。

「私は英語が苦手だし･･･」と尻すごんでしまわないで、今後の訪問には英語が苦手な子も積極的に参加してほしい。

2、ホストファミリー

●ホストファミリー紹介

○マナ

・将来の夢はサメの研究者
・家では割と大人しい
・同級生の男の子のご飯を作りに行ったり、結構姉御肌
・学校では、環境問題のクラブに入っていて、地元の小学生に環境問題について指導したりしている
・音楽大好きで、Museというバンドのファン
・ピアノがうまい
・年上の男性が好きで、元彼は２７歳

実は、買い物をしていて、この元彼さんと偶然出会うという驚きの出来事があったり…。
私の滞在中は、ずっと風邪を引いて、いろんなところに連れて行ってもらうのがちょっと申し訳なかった。

○リチャード（ホストファザー）

・ものすごくかっこいい
・元美術教師
・心臓の大きな手術をされていて、今は教師をやめて家で家事を担当
・自宅の壁などはリチャードが塗っている
・穏やかで、優しくて、英国紳士を絵に描いたような人
・夕食は、リチャードが作ってくれる

リチャードが若いときに描いた絵も見せてもらった。
そのうちのひとつは、リチャードの知り合いのカップルがなくなったときに描かれた作品で、一見すると普通の山や雲だが、よく見ると抱き合う男女に見えるというトリッキーなものだった。
マナが小さい頃、子供部屋の壁を動物がいっぱいのファンシーな柄にしたのだが、年頃になったマナがその壁を嫌がったため、今はリチャードがその部屋を使っているという切ないエピソードも。

〇ジャネット（ホストマザー）

・常にテンションが高く、人と話すのが大好き
・人見知りってなに？美味しいの？というくらいフレンドリー
・元ナース、腰を痛めて退職
・今はナショナルライブラリーに勤務
・ウェールズに誇りを持っている

自分の意見をかなりズバズバ言う人で、正直グサッとくるときもあった。
でも、マナは慣れているのか「うるさいでしょ？」と余裕の反応。
ただ、ずばずば言ってくれたおかげで、たぶん何も言わない人と一緒にいる人よりいろんなことを考えられたし、自分を振り返ることもできたので、私にとっては本当にありがたかった。

※おまけ　～ナショナルライブラリーについて～

ママの勤務してるナショナルライブラリーは、図書館と銘打って入るものの、地図、絵画などさまざまなものを保管する図書館を超えた図書館。

少なくとも、私達が案内していただいた場所には１箇所も「図書館らしい場所」はなく、むしろ美術館という風情だった。絵画の保管室は、火事になると酸素を全部外に出すことで消火するという、「それって絵は助かるけど、人は死ぬよねっ？！」と突っ込みたくなるようなガッツのあるシステムを採用している。

この事からもナショナルライブラリーの本気が伺えるだろう。

●エピソード

「分かった振りはしない主義」

私は小心者なので、日本にいてもそうなのだが、ウェールズ滞在中はいつもにも増して「**分かった振り**」をしていた。もちろん、ある程度は聞き返す。しかし、会話のテンポのことを考えたるすると、あんまり聞き返すのもなぁなんて思ったりするのだ。ただ、マナのほうも「あっ、今分かってないけど、流したな」というのが分かるときがあったので、お互い様という感じもあった。マナ以外も、ほとんどの人は「分かった振り」をある程度していたし、されていたと思う。

しかし、ママはほとんど分かった振りをしない人だった。私のいっていることが分からないときは明らかに「**分からない**」という態度を示してくる。あまりにも話が通じないため
「ＯＫ、もういいわ」
と、会話を強制終了されることも何度となくあった。
その日も私は「服」のことを「クロス」と言っていて(正しくはクローズ)、不可解な顔をされていた。たまりかねたママに
「ねぇ、さっきから「クロス、クロス」って言ってるけど、「クロス」ってなに？」
と尋ねられやっと自分がおかしなことを言っていることに気づいた。そして、私が自分のあまりの英語力のなさに申し訳なくなって謝りまくっていたら、こんな風に言われたのである。

「ほかの人は、あなたの英語が分からなくても、分かった振りをするわ。
でも、私は分からないときはちゃんと分からないっていうようにしてるの。
分かった不利ではあなたのためにならないからね」

これを言われて、今まで「分かった振り」ばかりしていた自分を少し反省した。「分かった振り」も時には必要だが、わからないときに分からないと言える勇気も大切だと思う。

「自分の国に誇りを持って」

「**あなたは、アメリカンイングリッシュね**」
これはママに何度も言われたことのひとつだ。
それというのも、到着初日にしてこんな会話があったからなのである。

ママ「**ラビッシュって何か分かる？**」
私　「**えっ？動物ですか**」←**ラビットだと思った**
(ママのこいつ何を言ってるんだという目線)
私　「**分かりません…**」
ママ「**これよ**」
(ゴミ箱を見せるママ)
私　「**トラッシュのことですか？**」
ママ「**あぁ、それアメリカ英語よ**」

イギリス英語とアメリカ英語が違うと言うのは以前から聞いていたのだが、実際に直面すると、想像以上に戸惑うものである。私は、自分が習っている英語がイギリス英語だということすら知らなかったのでかなり驚いた。
イギリスの人たちは、私達が思っている以上にイギリス英語にこだわりを持っている。
ママなんかは、アメリカ英語を「**ダラダラしてる、メリハリがない、発音格好悪い、伝統的じゃない**」罵倒しまくっていた。

ママは、本当にウェールズを愛している人だった。日本人は「日本なんて･･･」と謙遜するのが美しいと考えているが、自分の国を愛して、自分の国がどれほど素晴らしいかを目を輝かせて語るままを見ていると、**謙遜だけが美しいわけでもない**んだなぁと思った。まぁ、私は心の中では愛国心バリバリなのに「日本なんて･･･」と口では言っている日本人も「ＴＨＥ日本人」という感じで結構好きなのだが。

「洗濯、毎日はしません」

ウェールズ滞在中、日本食が恋しくなることもなければ、家族となじめないと言うようなこともなく、ほとんど問題なく過ごしていた私。そんな私の数少ない困ったことのひとつが「**洗濯**」である。私は事前研修会でいただいたプリントに「洗濯ができるので、あんまりたくさん服は持っていかなくて大丈夫」と書いてあり、小谷さんが「３セットくらいで」とおっしゃっていたので、服を３セットしかもって行かなかった。
ママに「洗濯がしたいのですが･･･」と言うと「私がするから置いておいて」とのこと。ここまでは事前研修で聞いたとおり。しかし、このあと重大な事実が発覚する。なんと、向こうでは**洗濯を３日に１回くらいしかしない**のである。私の中には「洗濯を毎日しない」という発想そのものが無かったので、最初の方は自分の渡した洗濯物が返ってこなくても「天気が悪くて乾かないのかなぁ」くらいに思っていた。さすがに、数日たつとこの事実に気付いたが、どうすることもできず、結局、万が一のために持ってきていた下着を、私の想定していた万が一以外の目的で使うことになってしまった。
自分の当たり前が、必ずしもみんなの当たり前ではない。それを身にしみて感じた出来事だった。
私は、いい経験になったと思っているが、次回からの参加者には「**服は３セットでいいけど、下着は日数分あったほうがいいよ**」という旨をぜひ伝えていただきたい。

「あなたはゲストだから」

ある日のママと私の会話

私　「お風呂入ってもいいですか？」
ママ「いいけど、あなたは毎日お風呂に入るの？そんなに、お風呂ばっかり入ってると皮膚　　がなくなるわよ」
私　「えっ、こっちでは毎日お風呂入らないんですか？！」
ママ「えぇ、ウェールズではお湯は高価だから。髪は毎日洗うけど、そんなに毎日毎日お風呂にはいったりはしないわねぇ」
私　「すみません、ぜんぜん知りませんでした。今度から、私もシャワーだけにしますね」
ママ「いいのよ、**あなたはゲストだから**」

またある日のママと私の会話

私　「寒いんで、布団の上にコート掛けたいし、玄関のコート部屋にもって行きますね」
ママ「あら、寒かった？暖房の入れ方教えてあげるから暖房入れたら？」
私　「ありがとうございます」
ママ「ウェールズでは、暖房は高いのよ」
私　「すみません･･･、あんまりつけないようにしますね」

ママ「いいのよ、**あなたはゲストだから**」

滞在中、私が一番へこんだのがママの「**あなたはゲストだから**」発言だった。「全然、フォローになってないんですけどっ！」と心の中で何度突っ込んだことだろう。正直「あんまり使わないでね」と言われるより使いにくい。

しかし、この言葉のおかげで、私は「外国の人は優しいなぁ、外国に住みたいなぁ」という安易な発想に陥らずにすんだ。「ゲスト」として親切に接してもらっているのだから、優しく感じて当たり前なのだ。だって、逆に自分の家に外国の方が１週間泊まるとなったら、私だって気も使うし、優しくもする。間違っても目の前で大喧嘩したりはしないし、きついことも言わない。なんと言っても、その人は「お客さん」なのだから。

自分達はゲストでしかない。それは寂しいことだが、実はすごく大切なことだと思う。私達の知らないところでは、どろどろした人間関係も、死にたくなるようなつらいこともちゃんと起こっている。私達が「ゲスト」だから見ることができないだけなのだ。

「日本の祭日は？」

皆さんは、日本の祭日についてどの程度の知識があるだろうか。私は、ほとんどと言っていいほどない。そんな私を最高に困らせたママの質問。

ママ「日本の祭日どんなのがあるの？」
私　「天皇誕生日とか、前の天皇の誕生日とかですかね」
ママ「それは、何月何日？」

(私の心の声)　**そんなの知らないよ～！**

冬だよな、たぶん
でも、何月何日かまで知らないって
こんなことなら、「体育の日」とかにしておくんだった･･･
格好つけて「天皇誕生日」とか答えるからこんなことになるんだよ
「知りません」とか言ったら日本人馬鹿だと思われるだろうなぁ

私　「日本では、連休にするために祭日が月曜日にしてあるんで、日にちとかはちょっと分かりませんねぇ」

何たる苦しい言い訳(笑
まず、天皇誕生日は月曜日になっていないのだが…。

外国に行くのになにが必要かと問われたとき、かなりの人が「語学力」と答えると思う。もちろん、私も実際に行ってみて語学力の必要性は痛感した。しかし同時に、「語学力」は何とかなるとも思った。簡単な単語、簡単な文を並べておけば、スムーズな会話はできなくても、言いたいことくらいは伝わる。それにあくまで**「言葉」は道具でしかない**。自分の伝えたいことがあって始めて「言葉」は力を持ってくる。だから、**知識や考えを持っていなければ、いくら英語がぺらぺらでも何の意味もない**。私のように祝日も知らないのでは、英語力も何もあったもんじゃないのだ。仮にあの場面で、私が英語がぺらぺらしゃべれていても、せいぜいもっと上手い言い訳ができたとか、その程度の差である。
外国で何かしたいなら語学を勉強するに越したことはない。だが、**「外国で」という修飾語がついても「何かする」という部分はあまり変わらない**ことを理解しておかなければならない。**自分の今いる場所で、いろんなことを見て、聞いて、考え、自分を磨くこと**。それが将来どこで暮らすにしろ重要なことなのではないだろうか。

ちなみに天皇誕生日は１２月２３日！

2、ウェールズの生活

●風土
・**広大**で、景色がとてもきれい
・**動物が多い**。右を見れば羊、左を見れば羊、後ろを見れば牛といった感じ
・アベリスツイスは、劇場や映画館があり、**文化的**な町
・**寒い**。１１月にしてすでに、日本の真冬並の寒さ
・生活水準は、日本と似通っている
・ファッションなどの文化も、基本的には日本と似たような感じ
　ちなみに、ドバイは日本に比べて派手

～映画館inアベリスツイス～

アベリスツイスの映画館は、日本の映画館と違い、スクリーンの前に幕があり、開演時以外はそれが閉めてある。また、映画を見る場所そのものに売店があり、ポップコーンなどを買うことができる

映画館の会場後の流れ

幕が開く
↓
映画以外のＣＭ(ビール、香水など)
↓
幕が閉まる
↓
幕が開く
↓
映画のＣＭ
映画本編

幕が開くたびに、拍手や口笛
ＣＭなのに大盛り上がり
テンション高いっ！

●政治

・女性の議員がとても多い(以前は男性よりも多かった)
・国会は透明性を重視
・誰でも議会を見に行くことができる
・議事堂は近代的な建物で、環境にも配慮している

議会をする建物で時にはファッションショーが開催されたり、日本とは議会のイメージがまったく違う

●食事

・日本と比べて薄味
・量が多い
・野菜中心
・焼きそば＋カレーなど日本では絶対にやらない組み合わせもある
・緑茶は「グリーンティー」として販売されていて飲むことができる

「いただきます、ごちそうさまでした」

ある日の夕食にて

私　「(手を合わせて)ごちそうさまでした」
ママ「あなたは、食事の後にお祈りをするのね」
私　「これは、お祈りじゃなくて、作った人に対しての感謝の気持ちなんです
　　こっちでは、そういうのってないんですか？」
ママ「神様にお祈りする人もいるけど、普通の人はしないわねぇ」

　ウェールズでは、神様に感謝する言葉はあっても、作った人に感謝するための言葉はない。「いただきます、ごちそうさま」の習慣は、日本特有のものなのだ。私は神様をあまり信じていない。だから、私にとっているかいないかも分からない人ではなく、ちゃんとそこにいる食事を作ってくれた人に対して感謝しようとするほうが、リアリティーがあって好きだ。壮大さは無いが、血の通った暖かさがある。「作ってくれて当たり前」という風にならず、ちゃんと毎回感謝をする「いただきます、ごちそうさま」の文化は日本が世界に誇れるもののひとつだ。

　最近「いただきます、ごちそうさま」を言わない人が増えていると聞くが、本当にもったいないことだ。この素晴らしい文化がなくなってしまわないことを願わずにはいられない。

３、学校

●制度、授業

・３歳からの子供を対象とした保育所的なものが小学校の建物内にある
・小学校では１クラスに先生が**複数**
・生物など、日本では文章を書かないような教科で**文章を書く宿題**が出る
・**詩のコンテスト**などが開催されている
・掃除の時間は**無い**
・小学校は**親**が学校に送り迎えをする
・放課後は基本的にはあまり学校に残らない
・日本のようにバリバリやる部活動は無い
・ウェールズ語の学校と、英語の学校がある
・**先生が遅刻**してくることもしばしば
・日本のようなかっちりとした制服は**無い**
・自分のホームルームで授業を受けるのではなく、それぞれの教科の場所に行って授業を受ける
・高校は、日本の**大学のようなシステム**で、自分で受ける科目を選択をする
・女子はみんな**メイク**をしている

先生が２０分近く遅刻をしてきて、授業が実質３０分だったり、日本ではありえないようなこともまかり通っている。また、日本の高校に比べて全体的に**ゆるい感じ**で、休憩室には**ゲームがおいてあったり、音楽が大音量でかけてあったり**する。それだけ、自分自身で切り替えがしっかりできるということなのだろうか。

日本とは逆で、小学校のほうがきっちりとした制服があり、高校は比較的自由な服装で通学することができる。授業の様子もそれに比例していて、**小学校のほうが緊張感のある感じで授業が行われていた**。教育のシステムが、とても質が良く、自分に子供が生まれたら、こういう学校に行かせたいなぁと思った。日本なら、私立の学校でしかできないようなことを公立の学校でも実践していて、見習わなければいけない部分も大きかった。

●高校生

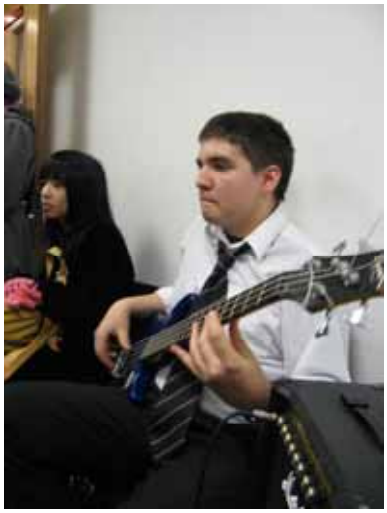
・学校が終わった後はショッピングに行ったりカフェに行ったりする
・パーティーをしばしば開く
・夏にはキャンプをしたりもする
・日本の高校生（あくまで私の周りのだが）より元気

容姿がとても大人っぽく、最初は「めっちゃ大人っぽいやん･･･」と気後れしたが、話してみるとぜんぜん私と変わらなかった。かっこいい人見たらキャーキャーいうし、甘いには目がない。良く、外国の子供は大人びているという話を聞くが、そういう印象は受けなかった。**日本と一緒で人それぞれ、大人っぽい考えの子もいれば、わちゃわちゃしている子もいる**という感じだ。

ただ、日本の**高校生に比べて元気**だなぁという印象は受けた。お国柄なのかもしれないが、テンションが高くて「イエーイ！」みたいなノリが割りと頻繁に見受けられたし、ハイタッチをなんて日常茶飯事だった。

また、**放課後をすごくエンジョイしている**なとも思った。私だけなのかもしれないが、放課後どこかに寄り道をして帰るという発想自体がまず無かったので、普通にカフェに連れて行かれたときは少し驚いた。でも、それが普通になってくると、逆に「学校行って、家に直行して、ご飯食べて、寝る」という私の生活っていかがな物なんだろうと、自分の生活の枯れ具合に少しへこんだ。

「あなたは将来なにがしたいの」



最初、マナにこの質問をされたときは少し戸惑った。やりたいことはある、でもできる可能性は限りなく低い。だから、あきらめたほうがいいのかもしれない。そういう葛藤が行く前からずっとあったからだ。しかし、マナは私に「**私は、サメの研究がしたいの**」と真剣な表情で言った。世の中に、サメの研究で食べていける人がいったい何人いるだろうか。いっそ無謀ともいえる発言を、なんのためらいもなくしてしまえるマナ。「こいつすげぇな･･･」そう思った。

しかし、別の日。別の子にも、同じ質問をされた。そして、彼女はこう言った。

「**私はね、ジャーナリストになりたいんだ**」

スケールがでかい･･･。ウェールズの子は基本的に**自分の夢に対して自重しない**。日本の高校でよく聞かれる「公務員になって安定した生活を･･･」なんて言っている人はむしろ少数

派だと思う。

この話を帰国後担任に話すと「北部の子は特にそうなんだよねぇ」とおっしゃっていた。北部では、金銭的に厳しい家庭が多いため、親は子供に対して「自分のやりたいことをやってほしい」以上に「安定した収入を得てほしい」と考える親が多いそうだ。また、実際に触れることのできる職業も限られているため、どうしても夢が抱きにくいともおっしゃっていた。

しかし、私は、そのせいばかりではないと思う。アベリスツイスだって、そんなに都会ではないし、マナの家も特に金銭的にゆとりがあるという風ではなかった。やはり、根本的な考え方の違いなのだと思う。

先生は「北部のこの環境では仕方がないことなんだ。仕事以外で自分の好きなことができたら良いね」とおっしゃっていたが、私は最初からそういう風にあきらめては駄目だと思う。私自身、正直なところ未だに胸を張って夢を語ることはできない。「どうせ、私には無理」という気持ちがもくもくわいてきて、つぶれてしまいそうになる。でも、マナやアベリスツイスのみんなであって、やっぱり**夢を持って生きたい**と思った。

そして、北部も高校生が「安定するから」とかそういうのではなく、「自分が何がしたいのか」しっかり考えて、進路目標が立てれるような環境になったらいいなと思う。

５、平和

アベリスツイス滞在中、フランク・エバンズさんのお墓にお参りしたり、フランク・エバンズさんの通っておられた小学校を訪れたりする機会をいただいた。また、私のホストファミリーの親戚が、エバンズさんの著書にかかわっておられた関係で、実際に「大江山の点呼」の英語版も見せていただくことができた。

そんな中で、私が最も印象に残っているのが、糸井先生のお話されていたエピソードである。エバンズさんは、再び与謝野を訪れるまで、ずっと日本を憎んで、憎んで生きておられた。近所で日本車を買った人がいれば、「なんてことをするんだ」と激怒し、「原子爆弾は最も素晴らしい発明だ」と声高におっしゃっていたそうだ。彼が大江山で受けた仕

打ちを考えると当たり前のことかもしれない。しかし、エバンズさんは与謝野を再び訪れて、ガラッと変わった。与謝野と、アベリスツイスの友好を図り、このような高校生の交流が行われる礎を作ってくださった。

きっと、**戦争さえなければ、エバンズさんと与謝野の人は憎み合うことは無かった**だろう。戦争が兵士と捕虜という関係を作り出して、そこに友好が生まれることを阻止し、憎しみを作り出したのだ。だが、そこまでして行った戦争に意味はあったのだろうか。私達はその戦争から何かを生み出しただろうか。答えは当然否である。

歴史の教科書を見れば、私達の歴史がいかに戦いと共にあったのかを思い知らされる。いったいいつまでこんな無意味なことを繰り返すのだろう。もうこれ以上争いの歴史は必要ない。

６、終わりに

帰ってきてからよくこんなことを聞かれる。

「何か変わった？」

私はこの質問が苦手だ。みんな「当然何かあなたの中で変わったはずだよね」という顔で聞いてくるから、期待を裏切るようで申し訳なくなる。確かに、よく海外に行った人が「人生が変わりました」といっているのを聞くし、私自身出発前は何か変わるに違いないと思っていた。しかし、残念ながら、私は何も変わらなかった。いろんなことを考えて、いろんなことを感じて帰ってきた。でも、変わりはしなかった。

人間の適応能力とはすごいもので、そう簡単に衝撃を受けたりはしない。絶望的なくらいに温度が変わるシャワーも、タンクに水がたまるまで流れないトイレも気がつけば当たり前になる。最初は驚いても「違う」ということが認識されれば、脳みそは平気な顔をして受け入れていくものだ。文化の違いなんて所詮その程度の溝なのかもしれない。

結局、私は私でしかなくて、１７年間必死で作ってきた自分をそう簡単に変えれそうにも無かった。ただ、私は、そこがどこであれそれなりに私を生きられるくらいには、信念を持って「Ｈ．Ｋ．」をやっているんだなぁとは思った(ちなみに「戦争は２次元だけで十分」というのも私の信念のひとつ)。

別に日本にこだわる必要は無い。それはすごく思う。でも、私は「逃げる」ために日本を出るつもりは無い。私が日本を出るのは「勝負を掛ける」時だ。

新たなる一歩

M．O．

この秋、アベリスツイスへと行き、ホームステイさせていただき、地域の人々と交流したことは今までの僕の人生においてとても新鮮なものでした。生まれて初めての外国へ行く飛行機は恐怖も不安もあったけど、これが自分達を海を越えた国へと連れて行ってくれるからすごい乗り物だと思いました。ドバイやバーミンガムでも飛行機から降りた瞬間、「ついに来たんだなぁ」と実感しました。

僕は昔から外国に憧れていていつかは行きたいと思っていたし、将来は海外を舞台に仕事をしたいとも思っていました。そしてこの企画を実際に体験した一つ上の先輩から知り、外国の文化や生活習慣、人々との接し方を学びたくて応募しました。でもちょっと観光旅行で行く気分もありました。でも五回の事前研修をしたり校長先生の激励の言葉を受けたりして、観光旅行や物見遊山ではなく勉強しに行くのだと実感しました。具体的に何を勉強したかというとその場で自分が興味を持ったものはすべて勉強になりました。例えば、ウェールズの首都カーディフへ行ったとき、日本でいう国会みたいなウェールズ議会を見学しました。そこの建物は高機能な技術で建てられており、市民も政治家も平等という理念の下に一般の人々も直接、国会議員の会議を見れるようになっていました。

このように日本とはぜんぜん違う政治の制度を知り、政治については全くと言って興味ない僕でも興味を持って見学することができました。ずっと同じ視点でものを見るよりもちょっと違った視点でみるとそれに対する興味が変わってくると思いました。それは政治のことだけはありません。他の様々なことに関してもいえます。

言葉の面ではわりと順調でした。今までの英語の勉強で培ってきた単語力や熟語力がものをいいました。単語の羅列だけでもなんとかなるときもあります。それに言葉で通じなかったら何かに書いたり、ジェスチャーつまりボディーランゲージなどで表現すれば十分伝わるということがわかりました。英語のテストでは三単元などの文法事項をふまえて表現しなければ正解になりませんが、ああいう場では相手に伝える上では何を用いてもちゃんと理解してくれればそれで正解なのだと思います。でも帰った後英語の勉強をして口語表現や単語をみたとき「あの時これ使えたなぁ」とちょっと後悔しました。だからこういう経験を生かして次どこか英語圏の国へと行く時はできる限りの単語や口語表現を勉強して行きたいです。

生活面でちょっと意外だったことは就寝時間や入浴はいつするかということです。日本の高校生は基本的に就寝時間は遅いと思います。これはあくまでも僕の推測ですが、勉強やクラブ活動などをしていて、早くても１１時半頃になると思います。でも僕がホームステイさせていただいた家では寝るのは遅くても十時頃と聞いて大変びっくりしました。かといって勉強を全然しないわけではありません。でも確かに英国のクラブ活動は日本のそれと比べると大変かけ離れているものです。日本の部活動は何か一つのだけのものを決めそれをずっとやる。しかし英国では色々な種類のものができ、毎日やらなければならないということもない。どちらが正しいとは一概には判断できませんが、僕はどっちもありだ

と思います。何か一つのことにかけて熱くなるのも良し、色々なものを体験するのも良し。こういう違いをしっかり理解するうえで、国際相互理解が成り立つのだと思います。

後、入浴するときは大体朝で夜は入らないそうです。これには感嘆の笑みをもらしました。物心ついたときからお風呂は夜に入っていたからそういう固定観念が染みついていたのだと思います。

食べ物はすごくおいしかったです。行く前はイギリスの料理は不味いというのが世界的に有名というのを聞いていてあまり期待していなかったものの、案外おいしいし、食べやすいものばかりでした。日本の人は行ったこともないのにあまり知った風な言い方をしないで欲しいと思いました。でも一品だけ無理な料理がありました。それはデザートに甘いスープのなかに白いご飯が入っていたものです。日本では白いご飯は大体しょっぱい味付けでたべます。でも外国では甘い味付けで食べるところもあるそうです。それはイギリスだけに限らず、東南アジアでも多いそうです。主食はパンやジャガイモでした。「ジャガイモは君達にとっての白いご飯みたいなものだよ。」と言われ結構驚きでした。ヨーロッパではパンを主食としているイメージが強かったからです。確かにドイツではジャガイモが主となっているとは聞きましたがイギリスでもそうだとは意外でした。

昔から気になっていたことがこのアベリスツイスへ行く取り組みでよくわかりました。それはイギリスというのはイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドという四つの国からできている、連合王国ということです。日本の人でこの事実を知らない人は多いと思います。僕はサッカーをやっていてよくワールドカップなどの試合をみます。でもそこにはサッカー発祥の国のイギリスというチームはないけど、イングランドと

いうチームはありました。その謎が事前研修になって解けました。そしてその四つの国は非常に民族意識や対抗意識が強いそうです。昔は別々の国で戦争などをして争っていたからだそうです。イングランドの人以外をイングリッシュと呼ぶのは彼らもしくは彼女達にとってとても失礼だそうです。

それ以来僕の中にはイギリスという国の概念は消えて、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドという四つの国になりました。これは世界史の授業で聞いたことですが、イギリスとう言い方は江戸時代の人々がイングランドのことをエゲレスと聞き間違えたことからきた言葉だそうです。つまりイギリスという呼び方はイングランドのことだけを指した呼び方になります。だから僕はその呼び方はあまり好きではありません。こういう些細なことから人種差別がでてくるからです。

でも未だに気になることがひとつあります。ワールドカップではそれぞれ四つの国で出るがオリンピックではグレートブリテン及び北部アイルランド連合王国として出るのか。これは現地の人から聞いたことです。このことについてはまたなんかの機会に詳しい人に聞いてみます。

実際僕が行ったアベリスツイスはウェールズにありました。ウェールズは英語だけでなくウェールズ語というものがあり、標識には大体英語とウェールズ語の二つで書かれていました。ウェールズには英語とウェールズ語の両方を話す人か英語だけを話す人のどちらかで、ウェールズ語だけを話す人はいないそうです。なぜなら本来使う言葉は英語ですが、教養としてウェールズ語を学ぶそうです。ウェールズ語は日本人じゃ発音できない言葉もありました。なぜ彼らが使いもしない言葉を学ぶその訳は、昔使われていた言葉を現代にも残すことで、伝統を引き継ぐことになるそうです。ウェールズの人々は伝統を大切にするそうです。

「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、この研修を通じて、実際に現地へ行き体験することは教室で教科書を開けてただ先生の話を聞くことよりもかなり価値のあるものと肌で実感できました。違う世界を直接学び視野を広げる楽しさも知りました。文化や生活習慣では異なった点もあったし、共通している点もありました。

僕はその異なった点を学ぶことにより、違った世界もあると視野が広がり、固定観念にとらわれにくくなりました。共通している点があることは少し嬉しかったです。

一番驚いたことは、ホームステイの方々はもちろん、直接は関係ない現地の人々も暖かく接してくれたことです。とても紳士的でした。外国人というだけで敬遠することもなく、やさしく接してくれる。国や人種が違っても同じ人間だということをちゃんと理解しているのだと思います。その点では日本とは違います。そして国境を越えたつながりや異国のものを受け入れることは改めて大切だと感じました。だから世界中でも差別がなくなるようにしたいです。世界の人種には大きく分けて黒人、白人、黄色人種とあります。アメリカでは黒人は白人から「カラード」と言われ、ひどい差別を受けていたそうです。今でこそ、マーティン・ルサー・キング牧師のおかげでほとんどなくなったものの、姿、形、色、が違うだけで同じ人間なのにそれだけで何故差別をするのか僕には理解できません。話はちょっと、変わりますが、僕がお世話になっていたホストファミリーのオワインはアメリカの大統領がオバマ氏に決定して、大変喜んでいました。僕はなぜそんなに喜ぶのかと聞きました。すると「彼は若く柔軟な思考を持っていて、アメリカ社会に何か革命がおきそうだから」と言っていました。僕と同じくらいの年齢で政治にたいしてこんな意見が言えるのはすごいと思いました。オバマ氏は黒人で、今までアメリカの大統領は白人でした。僕が思うには黒人が大統領になったこと自体がすごい革命で黒人差別だけでなく、差別そのものが完全になくなってほしいです。

この研修を通じて知った世界はあくまでもたくさんの世界の中のひとつであり、すべてではありません。けれどそのひとつを知ったことがきっかけでもっと多くの異国について学びたいという気持ちがより一層強くなりました。今回行った国は先進国で僕の住んでいる日本も先進国で格差もあまりありません。世界には想像できないような貧困、飢餓や紛争などで苦しんでいる国があります。僕は将来そういう人の助けになるような仕事がしたいです。まだ僕はスタート地点から第一歩を踏み出したところです。でも絶対この夢を叶えて世界中が平和に近付くことを願っています。

最後にホームステイの方々、引率の方々、与謝野町のみなさん、この事業を僕達のためにしていただき心から感謝しています。ありがとうございました。

アベリスツイス高校生派遣事業を終えて

M．N．

まず私の訪問目的は、日本の文化を伝える事でした。やはり他の国と日本との生活の違いは大きいと思ったので、このことが私の中での最大の訪問目的でした。

訪問を終えて、私のホストファミリーに日本の文化をたくさん伝えることが出来てとても嬉しく思っています。私のホストファミリーはとても積極的で、毎晩おりがみを教えていたり、箸の使い方を教えたりしていたことがとても印象深いです。ちゃんと日本の文化を伝えることが出来ているなあと思いながら教えていました。レセプションの日も、みんなで炭鉱節を踊ったりして、日本の文化を伝えることができたしとても楽しかったので本当に良かったです。

↑レセプションの様子

この研修に行って日本人が尊敬すべきだと思ったことは、積極的にコミュニケーションをとるということです。研修の間に“ Excuse me. ”や“ I’m sorry. ”という言葉を頻繁に聞きましたが、日本では「すみません」や「ごめんなさい」などあまり聞きません。私も研修に行くまでは人とコミュニケーションをとることがとても苦手でしたが、研修に行ってコミュニケーションをとることは大切なことだと改めて思いこれから少しずつでも直していこうと思いました。それと、とても驚いたのが家族の仲がいいということでした。もちろん仲のいい家族も日本にいますが、それ以上に仲が良かったです。本当に家族助け合って生活をしているという感じがしました。

逆に向こうの方々が尊敬して欲しいなと思ったことは、マナーが悪いということです。これも文化の違いから生じることなのかもしれませんが、飛行機を降りる時に機内がゴミでいっぱいだったので、これは駄目なことだと思いました。やはり公共の場などは自分だけの空間ではないので、１人１人が責任をもってゴミなどは捨てなければいけないと思いました。その点では、日本人は本当にちゃんとしていると思います。

↑会話の様子

参加して良かったと思うことは、自分自身が少しでも変われたということです。それは英語を話すということであったり、人間的なことであったり。もちろん英語の勉強をしに行った訳ではありませんが、イギリス独特の英語のなまりを発見できたり、ジェスチャーを見たりでき、本当にいい勉強になりました。人間的には私は、明るくなれたと思います。イギリスの方々はとても明るく積極的で、それに影響されて明るくなれたと思います。そして強くなれました。全てこの研修に携わって下さったアベリスツイスの方々のおかげです。

この研修を終えて、将来英語関係の仕事に就きたいと思いました。もっともっと英語の勉強をして、またアベリスツイスに行ってむこうであった方々に研修中には言えなかった感謝の言葉を言いたいです。

さて最後になりましたが町民のみなさん、みなさんの税金で研修に行かせていただき、本当にありがとうございました。とても感謝しています。

最後に私が皆さんに伝えたいことは、自分の周りの人を大切にしてほしいということと、戦争は二度としてはいけないということです。もしもイギリスと日本が戦争状態になったとしても私はこの交流で出会った全ての方々のことは絶対に忘れません。与謝野町とアベリスツイスとの交流が永遠に続きますように･･･。

END

アベリスツイス研修報告書

M．O．

「外国の文化を知り、日本の文化も伝えたい」というのが動機で応募しました。その他に、姉もこの研修に参加しアベリスツイスの話を聞き言ってみたいと思ったからです。1 日 1 日出発日が近づくにつれて、不安ばかりありました。特に、自分の話す英語が伝わるのかどうかが心配でした。

今回はドバイ経由でバーミンガム空港に行きました。日本からドバイまで約 12 時間、ドバイからバーミンガムまで約 7 時間ととても長かったです。経由のため 5 時間・４時間と少しずつの時差だったので着いたときはあまり時差ボケにはなりませんでした。ですが、狭いところでずっと座りっぱなしで疲れました。

‹ホストファミリー›

友好協会会長のアウェルさんの家にホームステイしました。6 人家族で、アウェルさん・奥さん（ホストマザー）・双子のお兄さん・お姉さん・ヘレッドです。双子のお兄さんはもう独立して一緒に暮らしていないそうで、今回会うことは出来ませんでした。アウェルさんはウェールズについてなどいろいろ教えてくれました。家の外と中では全然人が違うような気がしました。ホストマザーは本当に優しかったです。夜家に帰ると「今日は何をしたの？」と毎日聞いてくれました。それに料理がとてもおいしかったです。お姉さんは大学生で、週末に友達と帰ってこられて 3 日間ぐらいしか過ごせませんでした。ですが、大学で日本語の勉強をされているのでその課題を手伝ったりして話すことが出来ました。日本語書くのも、話すのもとても上手かったです。ヘレッドは私と同じ 17 歳でした。でも、同じ 17 歳と思えないほど大人びていて、運転免許も持っていました。なので、通学も車でした。日本では考えられません。ヘレッドと私はいくつか共通のものがあり、すぐ話すことが出来ました。

「これは日本語でなんて言うの？」とよく聞かれたので、家族全員がすごく日本語に興味を持ってくれていたみたいでした。ヘレッドがよく使っていたのは、「行きましょう!!」です。教えたらすぐ覚えて使ってくれました。ホストマザーも日本語を勉強しているらしく、ノートを見せてくれました。また、「おはよう」などの挨拶は、英語・ウェールズ語・日本語でしていました。簡単な言葉だけど 3 ヶ国語も使えてなんだか嬉しかったです。

‹アベリスツイスでの生活›

30 日(木)　　アベリスツイスの駅に到着（17:20 頃）すると、もうすっかり暗くなっていました。それから、お世話になるホストファミリーを紹介してもらい、それぞれの家に向かいました。車の中では緊張していましたが、話しかけてくれたので少し話すことが出来ました。誕生日の話だったり、何の建物か教えてもらいながらして家に着きました。

家の中を案内してもらったあと、日本に来た時の写真を見せてもらったりして話しをしました。その時に私の家族のことを話すと big family と言われました。子供の数は 1 人しか変わらないのにどうしてなのか気になりました。

夕食は、小谷さん・糸井さん・原田先生も一緒でした。初めてラザニアを食べ、おいしかったです。食事中はアウェルさんの話を聞きましたが、早すぎて分かりませんでした。

夕食後、お土産を渡しました。父が織っている着物の小物の生地で作ったテーブルセンターをすごく気に入ってくれました。ヘレッドはけん玉を気に入ってくれ、やってみせて欲しいと言われたのですがあまりしたことがないので困りました。あと、カイロを喜んでくれていました。寒いところなのに、カイロがないことに驚きました。

話そうとすると日本語がついでてしまって、言いたいことが全然言えなかったです。やっぱり難しいと実感しました。でも、答えるのに時間がかかっても最後まで聞いてくれたことがとても嬉しかったです。

31 日(金)　　ヘレッドの運転でみんなと待ち合わせの場所に行き、街へ。前日暗くて見えなかった街並みがすごくおしゃれで素敵でした。家もカラフル、道の両端に車が駐車されていること・・・等いろいろ発見でき楽しかったです。

昼食を食べ、メインストリートで買い物をしました。メインストリートだけあって、人も車も多かったです。ずーっと街を歩き、クリフ鉄道に乗り、丘の上に行きました。風が強くとっても寒かったですが、アベリスツイスを見渡すことが出来ました。海もあって、山(丘)もあって、建物もたくさんあって羨ましかったです。

一度家に帰り、夜からジェームズ・ボンドの映画を見に行きました。映画館内は 1 つしかスクリーンがありませんでした。それに、日本では本編の前に最新映画情報とかが流れますが、普通の CM みたいなのがながれていました。それから 1 番驚いたのが、始まったときの周りのテンションがすごかったです。拍手したり、声をあげたり・・・。まさかそんなことをすると思わなかったので、圧倒されました。

1 日(土)　　カーディフに向けて朝早くから出発。スクールバスで行ったんですが、運転も

豪快で揺れるため酔ってしまいました。改めて、こっちの人はなんて運転が豪快で、速度制限もあるのに速いんだろうと思いました。それに、半ドアになっただけで何回も盛り上がったので、本当にリアクションがいいなぁと思いました。

着くと初めにウェールズの政治が行われる場所に行きました。その建物は『政治家＜一般市民』という考えから工夫されて作られていました。政治家といったら、えらいから上というイメージがありどこでも当たり前だと考えていました。しかし、ここでは議会をしているところより上に傍聴席があり、本当に政治家より一般市民という考えがみただけで分かりました。議会は、時間が決められているためか女性も多く、ヨーロッパで唯一男性より多かったことがあるそうです。それに、発言も自分の席から出来るため移動時間が短縮されていて、日本の国会もとりいれたほうがいんじゃないかと思いました。

帰りの途中に、エバンス氏の小学校を見に行きました。外観は小学校という感じではなくて、どっちかといえば幼稚園的な感じでした。

夜は、ヘレッドの家にみんな集まりハロウィンパーティーをしました。食事をした後は、お互いが教えあってパンプキンを彫ったり、習字・折り紙をしました。1 度、パンプキンを彫ってみたいと思ったのでしることができ、とても楽しかったです。普通のかぼちゃより柔らかかったけど、ナイフで彫るのは難しかったです。その後、習字で「平和」を書きました。横で 1 画 1 画書きながら教えました。みんな、はらいなどにもこだわって書いていたのでとても上手かったです。

2 日(日)　エバンス氏のお墓参り。日本のお墓と違って、夫婦 2 人分だけというのが多かったです。聞いてみると、大きい広さを買うと家族も一緒に入れるらしいです。広さで変わるようです。場所も、山の中ではなく遠くまで見渡せる緑がたくさんあるところでした。その後歩いて近くの教会へ。アウェルさんがウェールズ語で賛美歌を歌ってくれました。生のパイプオルガンの演奏もありですごく素敵でした。

午後は海に行き散歩をしました。白い砂浜で広く、ちょうど夕陽になっていてきれいでした。高く盛り上がっているところから一気に駆け下りる遊びもして楽しかったです。

夕食はホストマザーのお母さん（おばあさん）も一緒に食べました。この日は『伝統的な日曜日の夕食』ということで、ローストビーフでした。初めてあんなに大きいお肉を家のオーブンで焼くところを見ました。

3 日(月)　　午前は城跡に行きました。やっぱり緑がたくさんあり、近くに羊もいました。高い場所だったので、そこから見る景色は日本では見られないきれいなものでした。

SL にも乗りました。その駅が山の中にあったので、山道を歩くのも大がいたりして大変でした。駅は小さくてかわいらしかったです。

4 日(火)　　前日と同様、学校に行きました。午前中に、エイミーが学校を案内してくれました。棟ではないけれど、ここは数学・ここは理科など固まって分かれていました。それに、授業は日本の大学みたいな感じで、自分がとっている授業があるときはその教室に行き、無いときは休憩室でいたり出来る感じでした。その休憩室はとても広く、テレビが置いてあり、ゲームをしていたのに驚きました。制服もトレーナーでブレザーとかみたいにきちっとしたものではありませんでした。それに、16 歳ぐらいからは基本黒の服でバッチをつけていたらなんでもいい感じでした。化粧やピアスも OK だったので、文化の違いや日本とは違い自由さを感じました。

近くのプライマリースクールにも行きました。日本でいえば、保育園・幼稚園と小学校低学年が一緒に通っているところでした。授業は、スクリーンとパソコンがつないであり、黒板みたいなスクリーンで授業をされていて、すごいなぁと思いました。なかには、チェロのレッスンを受けている子もいて、全然違うことばかりでした。

午後から金山に行き、洞窟に入りました。ヘッドライトをつけていても暗かったのに、昔はろうそくの火だけで狭い中何時間も働いていたことに驚きました。それに、そこで働いている人は平均寿命がとても若かったのでそれだけ重労働だったということが分かりました。それなのに、暗いなかで掘っているため掘り出したものを選別しても金は少ししか採れないというのを聞いて本当に大変な仕事だったと知りました。

5 日(水)　　午前、マーケットで買い物をしました。行ったお店の人が、日本に行ったことがあり良いところだと言われて嬉しかったです。自分の国を良いなんて国内にいるとなかなか聞けないからよけい嬉しかったです。

夜はレセプションでした。炭坑節を踊るため女子は浴衣を着ました。スピーチは考えてきた原稿を読んだけれど、緊張しすぎてボロボロでした。もっと練習しておけば

良かったです。余興でふるさとを歌ったときは、歌ってくれている人もいました。炭坑節を踊るのは恥ずかしかったけど、楽しくすることが出来ました。それに、最後にはみんなに教えて踊りました。楽しく踊っていてくれたので、やって良かったと思いました。

6 日(木)　博物館に行き、昔の服や道具を見ました。その後、国立ウェールズ図書館に行きました。とても広く、絵など工夫して大切に保管されていました。本が増えるにつれ、図書館も増築しているそうです。その週の土曜日から始まるというダヴィンチの展覧の準備を見ました。遠くから見たけれど、そんなすごいものが見られて嬉しかったです。

この日も、小谷さん・糸井さんも一緒に最後の夕食を食べました。

7 日(金)　朝早くに起き、駅に向かいました。車の中では、お土産の話等をしてホストマザーに「あなたのスーツケースはチョコばっかりね」と笑われました。駅では、手紙をもらったりしてお別れをしました。一週間も居たなんて思えないほどアベリスツイスでの生活は短いように思えました。それはホストファミリーなど関わったすべての人のおかげで楽しく・学びながら過ごせました。だから、もっと居たいと思ったし、また来たいと思いました。

この研修で、1 番思ったことは伝えたいと思えば、言葉が違っても通じるということです。いざ話すとなると、学校で習っているような英文はあまり使いませんでした。本当に簡単で中学校で習ったことを主に使いました。それに、単語を並べたり、ジェスチャーが多かった私ですが、最後まで話を聞いてくれました。言葉に関することがいくまですごく不安だったのに、伝えられるとすごく嬉しくて楽しかったです。

家の中でも外でもイギリスの文化にたくさん触れることも出来ました。しかし、日本のことを聞かれると思うように説明できなかったのが残念でした。もっと上手く出来ていれば良かったと思います。文化ではないけれど、日本語をたくさん教えてあげることは出来ました。今回をきっかけに、より興味をもってもらえればと思います。

このような貴重な体験をすることができ、町のみなさん・他にもたくさんの方に感謝しています。ありがとうございました。ホストファミリーも受け入れてもらい本当にありがとうございました。この研修で得たこと・学んだことを大切にこれからに活かしていきたいと思います。そしてなにより、与謝野町とアベリスツイスの交流が続くよう願っています。本当にありがとうございました。

アベリスツイス交流・高校生派遣事業実績報告書

Ｓ．Ｉ．

期間：平成 20 年 10 月２９日～平成 20 年 11 月 8 日

私がこの派遣事業の事を意識し始めたのは、中学校３年生の時でした。当時の高校１年生の人から現地で撮影した写真を見せてもらったり、体験談を聞いた事がきっかけでした。私は当時から旅が好きで、見ず知らずの土地に行く事が特に好きでした。さらにイギリスという国は、私の愛読書でもあったハリーポッターの舞台でもあり、憧れの国でした。このような理由もあり、最初はこの派遣事業をイギリスに格安で行ける旅行ツアーという風にしか考えていませんでした。また、英検を積極的に受験していたのも資格を持っていれば選考の際何かの役に立つのではないかという下心からでした。

しかし実際に事前研修を何度か受けているうちに、この事業の歴史、エヴァンズさんの思いを知り、自分がいかに浅はかであったかというのを知りました。

私はこの派遣事業で、アベリスツイスやウェールズの文化、イギリスの文化を教えてもらうだけでなく、同時に日本や与謝野町のことを伝える事を目標としました。これは中学 3 年生の頃読んだ新聞記事に書かれていたことで、「自分が何を伝えようと思うのか、どのように感じたのか、自分の国についてどう思うのかなど、自分の内面に伝える内容が無ければいかに英語が上手く話せてもホームステイの意味など無く、交流することも出来ない」といった意味のことでした。当時の私は「英語が話せること」がホームステイにおける一番重要なことだと考えていたのでかなり衝撃をうけ、その記憶が今でも残っていたからこのような目標を定めました。

私のホームステイ先の友人はエミルといい、本当にお世話になりました。ホームステイ先に名乗りあげてくれただけでなく英語でのクールな挨拶の仕方から、悪態のつき方まで、地元の生きた文化を教えてくれました。彼は旅が好きで、ドイツやフランス、日本にも来たことがあり、同じ旅好きな私の先輩でした。また、高校を卒業したあとには、

すぐに進学せず、半年働き、半年世界を巡るという計画を立て、将来は日本語の先生になりたいという明確な目標を持っていました。人生経験が豊かで自分よりも 2 歳も 3 歳も年上のように思え、まるで兄のように感じていました。

エミルの通っている学校に行った時、彼は私が周りの人と話しやすいように紹介してくれ、コミュニケーションをとるのがあまり上手くない私にとって本当にありがたく思えました。同世代の人々と話し、感じたことは、みな私よりも大人だということでした。17，18 歳になると、自分の進学に必要であったり、さらに学びたいと思う教科を自分で選択し、自分の夢に向かって努力していました。授業の内容について尋ねると、「難しい」という感想は良く聞きましたが、「面倒くさい」というものは聞きませんでした。彼らは自分の夢をかなえるために勉強しているのであって、強制されていない、という事が理由に思えました。自分も義務教育を終え、大学に進学したいという目標を持ち、高校に通っています。しかし彼らのように積極的に勉強しているかといえばそうではなく、見習わなければいけないと思いました。

私がアベリスツイスで会ったほとんどの人が、英語とウェールズ語のバイリンガルで、自分の住んでいる地域の文化を誇りに思っているように感じられました。エミルからも、生まれてまず最初に学ぶ言葉がウェールズ語である、といった話しを聞いたり、道路標識がウェールズ語と英語の二種類の言葉で表示されていて驚かされました。私が会った人はみな英語を喋ることができました。その為、英語のみの表示でも困ることはないのです。しかしそれでもウェールズ語を表示するということは、ウェールズに住む人々の誇りの表れだと感じました。また、ウェールズの首都であるカーディフで、ウェールズの議事堂を見学した時のことです。その議事堂は、雨水をトイレに利用し、太陽光を照明として取り入れて環境に優しいだけでなく、スロープを設置し、必要に応じて通訳をおくなど障害のある人にも優しく建てられ、議会の時間が極力短くなるように発言をそ

の場で行う事ができ、女性の議員も政治に参加できるよう配慮がなされていた。そのおかげで女性の議員の数が過半数を占めていたと聞きました。又、おしゃれなだけでなく、木の幹をイメージしていて、根が水を吸い上げるのと同じように、政治が人々の意見を汲み、ウェールズを育てていく、というコンセプトのもとで、議場が地下におかれていました。さらにガラスを多く使いクリアな政治という目標も掲げていました。やはり、イギリスは古くから議会政治が行われているだけのことはあり成熟しているように思えました。

この派遣事業の最中、最も印象的だったのは、滞在が終わろうとする時、エミルに"Ｙｏｕ looks like really local people. I 'm proud of you."と言われたことでした。これは「君は本当に地元の人みたいになったねぇ。僕は誇りに思うよ。」という意味で、お世辞半分だとしても、純粋に嬉しく思いました。エヴァンズさんは、「お互いの国の将来ある高校生が、交流し理解しあうことが両国の平和、世界の平和に寄与をすることを信じている」と言われましたが、私はその言葉の意味が少し分かったような気がしました。

ホームステイ先のエミルをはじめ、日本とは異なる文化の中で暮らす同世代の人々と交流しあい、刺激を受け、理解しあうことができ、この事業に参加できて本当に良かったと思います。来年アベリスツイスから研修性が来た時には、今度は自分がこの与謝野町の魅力を伝え、交流しあえればよいと思いました。最後にこの事業に関わっていただいた方々、本当にありがとうございました。

～アベリスツイス実績報告書～

Ｓ．Ｉ．

この交流は何年も前から続いているものであり、かなりの歴史のあるものでした。でも、私が最初に申し込むときには、何年も続いているという事は知っていたけど、そんなふうな大事な意味をもつ交流だとは思っていませんでした。

私が最初にこの交流に申し込もうと思った理由は、中学のときからその取り組みについても知っていたし、私の身近な人にも行ったことがあるという人がいて、どんなものでどんな交流をしているのか興味を持っていたからでした。それに、一番の理由は外国に行ってみたかったということでした。外国に行き、知らない国の文化をパソコンとかで調べたりするだけでなく、自分の目でそれを見て、体験してみたかったからです。でも、実際応募するまでには凄く悩みました。勉強が遅れるという事もあったし、何より英語をしっかり話せるのかという不安が大きかったからです。しかし、こんな体験は一生で一度しか出来ないかもしれない…と思い応募する事にしました。抽選で行けることになり、嬉しい反面、どうしようと気持ちもありました。その後、事前研修でこの交流についての目的を改めてしっかりと聞き、最初はすごくプレッシャーを感じました。そのプレッシャーというのは、この取り組みは何年も続いている歴史のある大事なものという事。そして、税金が使われているという事でした。私は、最初は税金という町の人から集めた大切なものがこんなふうに使われているとは思ってもいなかったからです。でも、慰霊碑のようなものの見学や、大江山ニッケル鉱山の跡地を見て、税金を使ってするくらい重要なものなのだと気が付きました。昔の自分達のやってしまったことを踏まえ、そんなことは後の世代の人たちにはしてほしくない、そしてもっとよりよく考え仲良くしていこうというお互いの国の姿勢を知り、プレッシャーを感じて迷っているなんて、町の人たちやこの交流を見守ってくれているアベリスツイス友好協会の人たちとかに悪いと思いました。税金を使っているのだから、しっかりとした気持ちで行かないと失礼だと思いました。

私がこれに参加してアベリスツイスに行く事になり、もちろん学校に言わなければなりませんでした。そうすると、私の友達もそれを知ることになりました。そうすると、友達は「どうしていくのか？」と聞いてきてくれました。そして、わたしは今までのいきさつや大江山であったこと、この交流の始まりについてすべて話しました。このとき、わたしは、これがこの交流を人に伝えていくという事なのかなと思いました。みんな、始めはまったくこのことについて知っていなかったし、この取り組みの事も知っていませんでした。でも、話していくと「へえー。」というふうに驚いてこの体験の事についてもっと知ろうとしてくれるようになりました。人から人へ、こういうふうにしてこの取り組みは伝えられていくべきなんだと思いました。それによって、フランクエバンスさんの思いも語り継がれていくのかなあ、と改めて感じました。

イギリスへ向かうとき、事前研修でたくさんの戦争などの歴史や今まで行ってきた人たちのことを聞き、役場の人たちも言っていたけれど、本当に物見遊山ではいけないと感じました。校長先生にも呼ばれた時もそう言われました。与謝野町を代表していくという事を心において、しっかりと恥ずかしくないようにしてくださいといわれました。そして、自分の中では、自分から進んでイギリスの文化・歴史について興味を持ち行動する必要があると思いました。

実際に、イギリスについてからやっぱり「言葉」という壁が心配になりました。自分は英語が話せるわけでもなく、相手の言葉を聞き取る力もそんなにありませんでした。そのため、それを最初は心配していたので、初めてホストファミリーの人たちに会ったとき、ホストファミリーの方たちは気さくに話し掛けてきてくれましたが、何を返していいのか分らない、どんな風に返答すれば話が続いて喜んでくれるかなあ、とかそんなことばかり考えていて気を使いすぎてまったく会話が成り立っているという感じではありませんでした。わたしは、無理に完璧な返答をしようと頑張っていました。でも、何日も過ごしていくなかである事に気付きました。それは、言葉が違ってうまく伝わらない事があっても、迷っていないで何かひとつの単語でも少しでも良いから思っている事を言葉にしてみれば、相手には少しだけかもしれないけど伝わるという事でした。また、言葉だけじゃなくジェスチャーでも相手に伝えることができるんだと分りました。とにかく、迷ってないで自分の伝えたい事、今思っている事を正直に伝える事が大切だと分りました。

相手に伝えたい！その気持ちが強ければ、方法はどうであれ伝わる。そして、もっとも大事なのはコミュニケーションは言葉だけでとるものではないので、まずホストファミリーに溶け込んで、仲良くなりたい！家族の一員になりたい！という意思表示をしっかりし、恥ずかしがらずに「自分」を明確にすることが一番だと思います。そうすれば、自分も相手もお互い、自然に心を開き合えて、次は言葉で表現できるようにもなり本当に心が通じ合うというか、よりお互いの関係を深めていく事が出来るのだと思います。

結局、日本人はよく「言葉の壁が…」などと自分の語彙や英語力等を否定し、それを言い訳にして少し消極的になっている人や、「どうせ自分は外国の人とは話せないし。」というふうに否定的になるけど、本当はそれは自分から「伝えたい」という気持ちをアピールし、相手に分かってもらおうという気持ちの強さのようなものが足りないのではないか…。もっとその自分の相手に対する気持ちが強ければ、相手に伝えるという事が可能になってくるのでは。こんなふうに、自分がアベリスツイスで過ごしているときだけでなく、飛行機の中や空港の中でもそう感じました。そこが、まず私が外国に行って最も感じた事でした。

そこで私がもう一つ感じた事は、相手の自己表現の大きさでした。私は自分の気持ちを表現したり自分の思っている事を表に出したりすることが苦手です。それを克服したいというのもこの交流に参加した理由でした。相手の国、また外国の人は自分の思っている事を隠さないで率直に相手に伝えようとしていました。料理がおいしかったら「美味しい」、

綺麗だったり凄かったりしたらビックリしたような表情を見せていました。そんなふうなところを見ていると、私と同じ年の人やほとんど変わらない人ばかりなのに何か「大人だなぁ」と感じました。どんな面でそう感じたのかというと、やっぱり一人で暮らすときには全部の責任を自分で負うとか、車の免許が早く取れたりするなど自分の責任を問われる部分がたくさんあるせいか、学校とかでも自分で将来の夢にあった科目を選択しすべてを自分でやらなければいけないような気がしたからです。それは大げさすぎる言い方かもしれないけど、そう感じさせるほど精神的な面や色々な面において、あっちの高校生は大人だなと思いました。そんなふうな違いを知ることが出来るのも、この交流の良いところだと思いました。

この他に感じた違いは、人への気配りの仕方や気遣いでした。どんな所かというと、例えば、ホストファミリーと食事をしている時に、私のお皿が空いたり手が止まったりすると、「お腹いっぱい？」とか「もっといる？」などと相手の行動をしっかり見て失礼のないように、という感じですぐに声をかけてきてくれて気を遣ってくれていました。確かに、日本人もそんなふうな気遣いを出来るかもしれません。いや、している人もいます。だけど、こんなふうにいつでもどんな時でも相手に気を使える人なんてそんなにいないと思います。外国の人たちは、一歩先のことを考えて「自分だけ」ではなくひとの行動もしっかり考えてくれているけど、わたしは自分ばっかりでそんな気は遣えないと思います。

日本の人々は、人のことを考えて気遣いの出来る人たちだ、と外国の人たちからは良くそんなふうに思われています。でも、ほんとうに自分が体験をしてきてみると外国の方が本当の気遣いを分っているのじゃあないかなと思います。日本人は、うわべだけの優しさのような所があり、本当にそんな心をもって接してくれているのかといえばそうじゃないと思います。自分の心のそこからそう思って行動できるというのはすごい事だと思いました。そんなところを見習う事が出来たらいいなと思います。

見習い所というか良いなあと一番思った事があります。それは、「言葉」でした。例えば英語では「ありがとう」と言うときに、「Thank you」と言います。でも、日本では、友達や同じ年代の人にはありがとうと言うけれど、目上の人に対してはです・ますをつけて言うのが礼儀です。私の経験では、そんなふうに尊敬語とかで話さなかったら怒られて注意されたことがありました。確かに注意されるのは当たり前な事だと思います。でも、そんなちょっとしたことが私には面倒くさく感じるのです。その点英語は、誰に対しても同じ言葉で同じように接する事が出来、楽という言い方はおかしいかもしれないけど、そんな場面が自分の目には印象的でした。それに、どいてほしい時や道をあけて欲しいときには、日本なら「すいません」とかしこまって申し訳なさそうに言わなければならないけど、英語なら、一言「Excuse me」と気軽に使えるので、私はどちらかというと人に対してそういうような言葉をかけるのが苦手だけど、これなら知らない人でも気軽に使えて、便利だなあと思いました。でも、よく考えてみると日本人の、人を敬うという姿勢はとても良い文化で、なかなか出来るものではなく、そんなちょっとした所も少し大げさな言い方になる

けど、人と人との関係がしっかりしているから、社会が成り立って世界一といっていいくらい平和な国なのかなあ、と自分の置かれている立場の幸せさを感じました。

今回の自分の行く目的は、昔大江山であった労働の事やフランクエヴァンスさんの残してくれた思いを知ることでした。でも、それと同時に私は自分の文化を伝えて相手の文化もいっぱい知ろうと思っていました。目標にしていた通り、私はたくさんの相手の文化を日本に持ち帰ってくる事が出来ました。そして、本来の目的である交流の歴史・目的を踏まえ、多くの方に伝えなければならない事柄を学んで、何を伝えていかなければならないのか、知ることが出来ました。それは、どちらの国もむかし戦争をしてしまった事を悔やみ、その経験を踏まえ絶対にこんな事があってはならない、戦争というものは人を傷つけてしまう最低なものだということを人に伝えていこうとしていました。それが、人が幸せに生きていくためのもっとも大事な事で、世界全体が平和になるというのは世界で最も難しい問題かもしれないけど、そんなふうに人に伝えていく事で戦う事の本当の恐さを知り、誰もそんなことはしなくなる、したくなくなる、そうなれば良いなあと願っています。

今までは、戦争について調べたりする事はあったけどここまで深く戦争について考えた事はありませんでした。戦争なんて自分には関係ない、昔の事だ、そう考えている自分がいました。でも今は、どこか知らない国だけでの話とは思わず、自分からそういうようなことについて知りたいと思えるようになってきました。そんな気持ちが本当に大事なんだという事をこの交流で学びました。そう思えるようになった事が自分自身の得た成果なのかなと思いました。

今回この交流に参加した時は、これで学んだ事をどんなふうに将来生かしていきたいかと聞かれたとき、私は職業とかで生かせていけたらと思いました。でも、今はまず第一にこの交流についてもっとたくさんの人に知ってもらい興味を持ってもらいたい。そして、世界と言う大きな部分に目を向けて今起きている事をテレビのニュースとかでも良いから自分の目で見て聞いて欲しい、そして自分もそうしていきたいと思いました。

この交流で自分のしたことや学んだことは、こんな年では普通は出来る事じゃあないし、本当にすごく「貴重な体験」と言う言葉一言では言い表す事は出来ないけど、一生忘れられないものになりました。これからも積極的に国際交流などの文化交流に参加したり出来れば良いなあ、そういう考えを持つ事ができるようになりました。そんなふうに自分の考え方を変えることが出来たことが自分の一番の成長であり、世界に暮らすさまざまな人々の存在を知って、その国の文化・歴史・生活を自分の肌で感じ、体験し、お互いに理解を深めていく事は、平和な国際社会を築くためにもとても重要であると思っています。

最後に、訪問させてくれたホストファミリーの人たちやアベリスツイス友好協会の皆さん、そして税金をつかって行かせてもらっているので、町民の人たちにも心から感謝したいと思います。本当に、貴重な体験になりました。参加してよかったと思います。この経験は、一生忘れずに自分の学んだ大切な事を伝えていきたいと思いました。

永遠の交流を願って

2008 年アベリスツイス訪問団　引率者
小谷　貴儀（与謝野町企画財政課主査）

１．今年も

今年もこの季節がやって来た。英国・アベリスツイスとの高校生相互派遣事業の実施で、今年は与謝野町の高校生がアベリスツイスを訪問する順番である。

この相互派遣事業は、平成 4 年（1992 年）にアベリスツイスの高校生 2 名を本町（当時は加悦町）に迎えてから、以降お互い順番に高校生の派遣を行っているもので、今年は本町からアベリスツイスへ 8 回目の訪問となる。私は平成 16 年からこの事業に携わっているので“今年も”である。

私自身は、4 年間で派遣と受入れをそれぞれ 2 回ずつ携わっており、交流した高校生（6 人×4 回で延べ 24 人）、その保護者、双方の友好協会会員をはじめこの事業に関係する方々と出会った人数も増えた。さらにお互いのホームステイ先での交流、見学、体験内容も承知している。周りからから見れば“国際交流のベテラン“か。しかし、私は英語を喋ることができず、せいぜいいくつかの英単語と中学校で教わった文法を覚えている程度である。しかも実を言うと私が英国への高校生派遣をゼロから準備するのは今回が初めてなのである。唯一、特別なことは 4 年前の平成 16 年（2004 年）に同じく引率者としてアベリスツイスを訪問した経験がある程度である。

このような状況で今年のアベリスツイスへの訪問準備をスタートさせたのである。

準備に取り掛かったのは 7 月中旬。先方への連絡は、全て現地の友好協会会長でペンウェディグ校長のアウエル・ジョージ氏へのＥメールで、もちろん英文である。アウエル氏には、私がアベリスツイスを訪問した際にお世話になったし、彼が昨年家族と本町にお越しになった際もお出会いしていたためお互い一応知り合いなのである。英語の出来ない私がどうやって連絡を取り合ったかと言うと、日本語を英語に、英語を日本語に翻訳するインターネットの翻訳サイトを利用したのだ。この翻訳サイトはクセがあると言うか、所詮コンピューターの翻訳である。口語体の文章を入力し変換すると滅茶苦茶な翻訳をしてしまう。しかし、これまでの経験から少々文法がおかしくても意味は伝わることを知っていたため余り気にしなかったが、念のため簡単な文法のみを使用し、かつ複数の翻訳サイトで変換し確認をしながら作成をした。日本語なら数分で仕上げる文章もこの方法では短い文章でもすぐに 30 分、40 分、ときには 1 時間以上かかったこともあったのである。

何はともあれ 10 月 29 日（水）から 11 月 8 日（土）の 11 日間、6 人の高校生と引率

者、通訳それぞれ 1 名、合計 8 人の訪問団とすることで調整を終え、次は団員の募集、選考である。

これと並行して通訳と引率者の選任を進めていたのだが、通訳には与謝野アベリスツイス友好協会副会長の糸井定次氏に初めてお世話になることになり、そしてアベリスツイス訪問の経験があって友好協会の事務局でもあり糸井氏と気心も知れた者ということで私が引率者となることになったのである。

糸井氏は、高等学校の元英語教諭、校長の経歴を持っておられ、昨年から友好協会の会員として活躍されている。糸井氏は実は私が峰山高等学校の生徒であった時の教頭先生であって、すでに退職されているにもかかわらず周りの方々が糸井氏のことを「糸井先生」と呼んでいるので、私も「糸井先生」とお呼びしている。また、糸井先生は、故フランク・エバンス氏（第二次世界大戦中に大江山ニッケル鉱山で強制労働の経験がありこの交流のきっかけを築かれた人物）の著書“大江山の点呼”を細井忠俊氏（加悦奥出身、カナダ在住）とともに現在翻訳中でもある。今回、通訳としてアベリスツイスを一緒に訪問いただき、空き時間があればこの翻訳に係る現地調査をされる。

私は、この事業の担当者として準備をしていたのだが、自分が引率者としてアベリスツイスを訪問することは想定していなかった。何故なら、これまで引率者には毎回違う職員が充てられていたたからである。縁あって再び引率者としてアベリスツイスを訪問することになるのだが、この 2 回目ということが私に相当のプレッシャーを与えた。通訳の糸井先生とともに高校生達を外国に連れて行き、アベリスツイスでの滞在日程をこなし、帰国するという一般的な引率業務に対しては不安は無かったが、訪問成果を 1 回目より多く持ち帰ることを求められており、言い換えるなら 2 回訪問した成果が必要と考えたからだ。

今回は、2 回目のアベリスツイス訪問であるため、関係者にどのような方がおられ、どのような交流イベントが行われるのか、ある程度知っていることが利点と考え、アベリスツイスの街、人、思いをより多く持ち帰り、それを与謝野町民のみなさんに広く伝えることを今回の任務とした。このため、この報告書は役所の公文書として組織内に報告、保管するのではなく、公開用に作成した。

２．いざ、アベリスツイスへ

団員 6 名は 9 月の半ばに決定し、全 5 回の事前研修を始めた。私は、高校生達がただ単に海外へ行って英語圏の生活を体験して帰ってくる、自分のためだけに参加することを最も恐れていた。そうであるならば行き先はアベリスツイスでなくても良いし、町が事業と

事業説明を受ける高校生と保護者

事前研修の様子

して実施する必要も無い。事前研修においては、この事業に対してどのように取り組むべきか、その姿勢を高校生自らに考えてもらうことにした。

性別、年齢、居住地区、学校がそれぞれ違う高校生達を相手に、第二次世界大戦中の捕虜による大江山ニッケル鉱山での強制労働の歴史、フランク・エバンス氏の来町、両町民の平和希求への思い、高校生相互交流の意義、町民への報告義務などを話したり、大江山運動公園に建立された慰霊碑やニッケル乾燥場跡の煙突の見学などの研修を行った。この段階では彼らがどのように感じたのか、アベリスツイスを訪問したら行動としてどのように現れるのか想像もつかなかったのが正直なところである。

そして、いよいよ出発の日を迎えた。

慰霊碑を全員で見学

乾燥場跡の 3 本煙突

炭坑節の練習

雨空の中、訪問団を乗せて町マイクロバスは定刻どおり 17 時に元気館を出発。2 日前にアウエル氏から入手したホストファミリー情報と滞在中の簡単な日程が書かれたペーパーを高校生達に配るものの、これからの不安と期待でいっぱいなのか反応は今ひとつ。大丈夫だろうか。中国自動車道西宮～宝塚間での事故渋滞もあったが岸和田 S.A. での時間調整により予定通り 21 時に関西国際空港に到着し、出国手続きを済ませ出発ゲートへ進む。言い忘れていたが、今回は直行便でヒースロー空港へ行きロンドンで宿泊をするというこれまでの行程をやめ、アラブ首長国連邦（UAE）ドバイ空港を経由しバーミンガム空港へ行き、列車で一気にアベリスツイスへ向かう行程としている。この行程は、昨年、与謝野町を訪れたアベリスツイスの高校生達が辿った行程の逆であって、引率のクリス先生から「バーミンガム空港を利用した方が、重たいスーツケースの持ち運びを考えると英国内の移動が楽」との情報を得ていたからである。しかも、石油マネーで潤っている UAE の航

関西国際空港

空会社エミュレーツ航空はサービスが良いと聞いていたことも、このルートを採用した理由である。定刻より 10 分早く 23 時 05 分に関空を出発。飛行機が定刻より早く飛び立つことがあることをこの時初めて知った。

バーミンガムインターナショナル駅

飛行機は現地時間 5 時 35 分にドバイ空港に到着（所要時間：11 時間 30 分）し、バーミンガム空港行きの飛行機に乗り換え、現地時間 8 時 20 分にバーミンガム空港に到着（所要時間：7 時間 30 分）し、JTB アシスタントの今井さんの出迎えを受けた。ここから、さらに列車でアベリスツイスへ向かうのだが、与謝野町を出発してから既に 24 時間を経過しており、機内で寝ていたものの高校生達は少々疲れた様子。駅はバーミンガム空港のすぐそばにあったので、移動はそれほど苦にならずクリス先生が言っていたとおりである。しかし、ここまで結構時間が掛かったのも事実で、次回のことも考えて今井さんにバーミンガム空港を利用した別のルートが無いのか尋ねたところ、「オランダやフランス等のヨーロッパの国を経由する便が近いが、金額は不明でエミュレーツ航空より高いかも知れない」とのこと。移動による疲労軽減は今後の課題である。

ウォルバーハンプトン駅

列車の遅延が頻繁に発生する英国であるが、ウォルバーハンプトン駅での列車乗り換えもスムーズに行うことができ、今井さんとはここでお別れ。いよいよ目的地アベリスツイスへ。定刻通り 17 時 22 分無事にアベリスツイス駅に到着すると、アウエル氏をはじめ多くの関係者の出迎えを受けた。（ここまで何のアクシデントも無く到着しひとまず安堵した。何故なら、過去には必ずと言っていいほど何かが起っていたのだから・・・。）

しかしなんと与謝野町を出発してから 33 時間以上も掛かった。駅には、昨年与謝野町に来た高校生達や、3 年前に引率者として来町したキャロライン夫妻の顔が見える。ケレディギオン郡の議員で土産屋を経営するケレディク氏も。すでに真っ暗な駅のホームでそれぞれのホストファミリーと対面した高校生達は不安な様子であるが、ここは英国アベリスツイス。もう自分達で何とかしなければならないのである。1 週間後の別れの際は家族の一員になっていることを期待しながら、それぞれのホストファミリー宅へ。いよいよ 1 週間のアベリスツイス滞在が始まった。

アベリスツイスの夜景

無事に着いたのであとは通訳に任せて引率者はゆっくり過ごせば良いというものではない。

海岸沿いのマリンテラス

アベリスツイス滞在中の私の最大の任務は“交流記録の保存”である。アベリスツイスでの行動はアウエル氏が計画したイベントに沿って行われる。基本的に日中は団体行動、夕方以降はホストファミリー宅であるため、撮影は日中の団体行動の様子が中心だ。ホームステイ先の様子は高校生達が自分で撮るであろう。前にも述べたが私のアベリスツイス訪問は2回目である。地理的にどこに何があって、いつ何が行われるのかおおよその見当がつくため、手際よく効率的に撮影できる。これは今回私の強みである。

今回、交流記録の保存に加え、アベリスツイスの街を紹介する四ツ切ワイド写真集を作成することにしているので、一眼レフの重たい広報用の専用デジカメを借りてきた。私が行動する時は常にこの重たいデジカメとビデオカメラが付いてきた。これが結構邪魔であることに加え、その姿がいかにも日本人の観光客と見られることに少なからず抵抗があったが仕方が無い。デジカメ用の記録媒体は全部で6GB以上持って来ているので何千枚も撮影可能だし、失敗したらその場で削除もできる。デジカメとは非常に便利なものである。

滞在中、とにかく撮りまくったのだが、難題もあった。それはデジカメとビデオカメラを一人で両方撮影することは非常に難しい。ビデオ撮影をしていたら「あっ、今の表情は写真に収めたかった！」ということがよくあるし、逆に写真撮影をしていたら「あっ、今の仕草はビデオに収めたかった！」ということもある。被写体は撮影のために行動を待ってくれないので、撮影のタイミングを逃してしまうのである。このことは行く前から分かっていたことなので、ビデオ撮影はほどほどに、悪く言えば「多少ビデオに残っていなくても・・・」との思いで、写真撮影に重心を置くことにした。しかし、助人と言ったら失礼だが協力者に恵まれたのだ。

日本語の教室と原田直美先生

彼女の名前は、原田直美さん。アウエル校長が運営するペンウェディグ校で日本語を教える教師である。彼女は、文部科学省の海外教師派遣制度のひとつで、各国現地学校への日本語指導教員を派遣するＲＥＸプログラムにより大阪府から派遣された府立金剛高等学校（富田林市）の教諭で、先月下旬にアベリスツイスに着任したばかりで、まだ１ヶ月しか経っていない。派遣期間は１年半とのこと。

原田さんは、毎日ではないが我々と共に行動をしていただいて、度々「撮りましょうか？」と、写真かビデオのどちらかの撮影をしていただいたのである。私の方もそのうち好意に甘えて、「撮ってもらえますか？」などと、まるで部下のように使ってしまったこともあり、猛烈に反省である。

しかし、原田さんのお陰で多くの写真を撮影することが出来たし、ビデオに映像として収めることもできた。本当に感謝である。原田さんも自分の授業の様子を自分で撮影することができないため、私が撮ったデータを差し上げたので感謝されましたが・・・。

３．奮闘！高校生

質問されると嬉しい　～ウェールズ議会庁舎～

滞在中において高校生達がホストスチューデントとの交流や施設見学、体験等にどのように取り組むのかは、私の最大の関心事であってこの交流事業の最も重要な部分である。平たく言えば積極性の有無である。なお、高校生達が如何に英語を上手く喋っているかという意味ではないことを付け加えておく。

アベリスツイス初日は、終日ホストファミリーと過ごすことになっており、高校生達にとってはいきなり異国で一人ぼっち。試練である。私はこの日の様子を知ることが出来なかったのだが、各家庭で過ごしたのではなくホストスチューデントと全員一緒に市内散策をしていたことを帰国後に知った。

ウェールズ議会議場

2 日目以降、ウェールズ・アベリスツイスの様々な場所に案内された（具体的な場所は別紙のイベント概要をご覧いただきたい。）のだが、2 日目にいきなり高校生達の交流姿勢を確認することが出来た。場所はウェールズの首都・カーディフ。

英国の正式名称は“ the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland ”日本語にすれば“ グレートブリテン及び北アイルランド連合王国“ となろうか。イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドから構成されている連合王国であって、イギリス議会とは別に、ウェールズ議会が存在する。このウェールズ議会庁舎があるのがカーディフで、この日は土曜日であったためホストスチューデントも含めて全員カーディフへ遠出をしたのだ。なおアベリスツイスからカーディフまで車で約 3 時間である。

ウェールズ議会庁舎は最近建てられた物のようで、専門の職員から環境への配慮、市民中心の議会運営等の建築デザインコンセプトの説明を受け、傍聴席、議場、委員会室を順に見学していった。そして説明した職員が「何か質問ありますか？」と我々に尋ねた時である。高校生達から「議員はどのようにして質問するのですか？」「議員の男女構成比は？」などと次々と質問するのである。正直これには

ウェールズ議会の説明を聞く高校生

驚いたし、「なかなかやるものだ」とも思ったのだ。
　説明した職員も質問されて、興味を持ってもらっていることが嬉しかった様子で、笑顔がこぼれこの後の説明にも益々力が入っているようだった。
　これまでの派遣で、与謝野の高校生達に地元の方から「質問ありませんか？」と尋ねられると全く質問がない。仕方が無いので地元の小学生に「じゃあ、日本のことで聞きたいことある？」と尋ねるとほぼ全員が手を上げたというようなことがあった。文化や性格の違いがあるにしても、この極端な差は寂しいと感じた。
　質問をした高校生の一人に後で「何故あのような質問をしたのか？」と聞いてみると、「加悦の有線テレビで与謝野町議会の様子を見たことがあって、疑問に思ったから。」とのこと。なるほど。

教え方と教わり方　～ハロウィンパーティ～

　カーディフのウェールズ議会庁舎を見学した同じ日（11 月 1 日）、アウエル氏宅に全員が招待されハロウィンパーティが催された。ハロウィンは 10 月 31 日であるし、集まった者が仮装したわけではないので正確にはハロウィンパーティではないのだが、高校生達がハロウィンのシンボルであるかぼちゃの提灯のくり貫き方を教わっていたので、私が勝手にこの夜のパーティをこのように名付けただけである。
　かぼちゃの提灯は、かぼちゃに目や口の穴を空け、内側にろうそくを入れるのだが、ホストスチューデントがやり方を教え、それを見よう見まねで与謝野の高校生達がかぼちゃをくり貫くという教え方だ。そのうち日本の習字体験が始まった。今度は与謝野の高校生が筆に墨を付け半紙に漢字を書く動作を見せ、ホストスチューデントがまねをして漢字を書くという先ほどと全く同じ教え方だ。（立場は逆であるが。）別の部屋では折り紙を折っている様子。いつのまにか家中が相互文化体験パーティになっていたのだが、アウエル氏や私、糸井先生が指示や提案をしたのではなく、高校生達が自発的に行っているのである。ここでも「なかなかやるものだ」と思った。

かぼちゃの提灯作り

習字を教える

みんなで折り紙

　アウエル氏の自宅には、奥様のリラさん、今回ホストスチューデントのヘレッドが住んでいるのだが、この日はメレリッドというヘレッドの姉が帰省していた。実はメレリッドは平成 15 年（2003 年）にこの相互派遣事業で加悦を訪問しており、秋田国際教養大学に留学中でもある。昨年、家族で与謝野町にも訪れている。何かと日本と縁のある

（というより加悦訪問により日本に興味を持った）娘さんで、私も彼女と出会うのは与謝野で 2 回、アベリスツイスで 2 回の 4 回目なのである。メレリッドは秋田国際教養大学の友人であるジョアンナを連れてきており、2 人とも、簡単な日本語を話すことができる。これに気が付いた男子高校生 2 人は、水を得た魚のように彼女達に日本語で話し始めたのである。彼らにすれば日本語で話した方が楽であるし思いも伝えやすいのだろうが、「せっかくアベリスツイスに来ているのだから英語で喋ったら。」と言うと、元通り英語とジェスチャーで話し始めた。私の中では記憶に残った出来事であった。

ダイニングで記念撮影

自由と責任　～ウェールズ教育制度～

日本の教育制度は基本的に小中高大 6.3.3.4 年である。新学期は 4 月スタート。イギリスの教育制度は日本のように単純ではないようなのだが、ホストスチューデントが通うペンウェディグ校を紹介しておこう。

ペンウェディグ校で授業見学

イギリスでは 5 歳から 11 歳までを初等教育としてプライマリースクールに通い、12 歳から中等教育校に移る。アウエル氏がペンウェディグ校の校長であることは既に紹介したが、ペンウェディグ校は中等教育を行う学校で、12 歳～17、18 歳までの生徒が約 580 人在校している。日本の小学校 6 年生の子供と高校 3 年生のお兄さんお姉さんが同じ学校に在学していることになる。

義務教育は 16 歳までで 17、18 歳の生徒は 6th Form（シックスフォーム）と言われ高等教育進学の学力試験に備える勉強をするようである。

<table>
<tr><td>年齢</td><td colspan="3">5　6　7　8　9　10　11</td><td colspan="3">12　13　14</td><td colspan="2">15　16</td><td>17　18</td><td>19　20　21</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">初等教育</td><td colspan="5">中等教育</td><td colspan="2"></td><td>高等教育</td></tr>
<tr><td rowspan="2">学年</td><td colspan="3" rowspan="2"></td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12，13
6th Form</td><td rowspan="2">通常3年間</td></tr>
<tr><td>Ⅰ</td><td>Ⅱ</td><td>Ⅲ</td><td>Ⅳ</td><td>Ⅴ</td><td>LⅥ・UⅥ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">私立校
Independent School</td><td colspan="3" rowspan="2">pre-preparatory &
preparatory
school</td><td colspan="5">Senior School</td><td rowspan="2">6th Form
College</td><td rowspan="3">大学
University

College of HIgher Education</td></tr>
<tr><td colspan="5">男子校は13歳から
女子校は11～13歳まで各年</td></tr>
<tr><td>公立校</td><td colspan="3">Primary School</td><td colspan="3">Secondary Scool</td><td colspan="2">Grammer School/
Comprehensive School</td><td>6th Form/
College of Future Education</td></tr>
</table>

※手持ちに適当な資料がなかったため、インターネットから入手したものである。

ペンウェディグ校内

ホストスチューデントは 6th Form の生徒達である。彼らは自分の進学に必要な科目を選択し授業を受けるスタイルで、日本の高等学校の様に 1 日中べったり学校にいて授業を受けることは少ない。学校では結構空き時間があるので、学校に 6th Form 専用の休憩室がありそこで自由に時間を過ごしている。なんとテレビゲームまで設置してあった。我々の滞在中、平日にもかかわらずホストスチューデントが我々と幾度と同行出来たのはこのような教育制度だからである。またホストスチューデントは、制服の規制が緩く、女性は化粧も出来る。車の運転免許も取ることができ、車で通学可能である。

ペンウェディグ校内を案内される

このような学校生活を目の当たりにした与謝野の高校生達は、「うらやましい」「日本の校則は細か過ぎる」と言い出した。この状況を見ればこの様な感想を言うのは理解できるのだが、「自由な分、個人にすべて責任が付いてくることを忘れてはならない」と教えると、「そうだよな」と言う者もいれば「うらやましい」連発の者も。高校生達は、自由と責任について考えさせられたようであった。

ペンウェディグ校食堂

もちろん得意です　～日本語授業～

ペンウェディグ校日本語授業

原田先生の日本語授業に飛び込みでお邪魔をした。生徒は 6 人でそのうち 2 人はホストスチューデントだ。我々日本人が 8 人教室にやって来たので、原田さんも気を使ってかマンツーマンで日本語会話のレッスンになった。当然、与謝野の高校生達は日本語が得意なので、ちょっと胸を張れるチャンスである。それぞれ会話練習の相手になり繰り返し練習。あとの予定が決まっていたため短い時間であったが、外国人への日本語授業がどのようなものかを知ることが出来たであろう。

帰国後、「来年度はこちらの生徒がお世話になるということで、それを楽しみに日本語の授業を頑張ってくれればと期待しています。訪問にあたって、事前・事後にこちらでできることがあればご連絡ください。」と原田先生からメールが届いた。彼らの日本語が楽しみである。

日本語で会話練習

４．ウェールズの自然文化

あなた達のおかげ　～天気～

アベリスツイス滞在中の全ての日が好天に恵まれた。イギリスといえば不安定な天気が有名であって先程まで晴れていても突然雨が降ったりするのだ。私たちがバーミンガム空港に降り立ち、列車乗り換えのために駅のホームに出た際は、寒風が吹き、それまで薄着であった服装から一気にコート、マフラー、手袋姿に変えた。10 月下旬であるのに冬状態。「昨日はロンドンで 70 年ぶりに雪が積もった。」JTB の今井さんが言う。

日本よりも寒い気候であるため覚悟をしていたのだが、滞在中は全く雨が降らずしかも晴天であったことは本当に幸運であった。すべての場所ですべてのことが順調に行き、そして大変美しい景色を見ることができた。地元の方も「こんな晴天の日が続くことは珍しい」と驚き、「あなた達が来てくれたおかげだわ。ずっとここに居てちょうだい」なんて冗談を言っていた。それほど珍しい事だった様だ。

ちなみに私達が帰国した翌日から雨になったそうである。

カーディガン湾とウェールズ大学校舎

広大な牧場と羊

ヴィクトリア調の建物が並ぶマリンテラス

言語の継承　～ウェールズ語～

ウェールズ語と英語が併記された標識

アベリスツイスはウェールズという国にある。イギリスは連合王国である事は既に述べたとおり。イギリスの標準語はもちろん英語であるが、ウェールズでは英語以外にウェールズ語も使われる。ウェールズでは、ウェールズ文化を後世に残して行こうと努力されており、道路標識、印刷物、ホームページ等は英語とウェ

ールズ語が併記されている。アウエル氏が運営するペンウェディグ校はウェールズ語系の学校であって授業もウェールズ語で行われる。ウェールズ人はバイリンガルなのだ。なお後に紹介するペングライス校は英語系の学校である。

英語に埋没せずウェールズ語を残していこうとされていることに見られるように、ウェールズ人としての誇りを持っておられるので、アベリスツイスでウェールズ語を話すと大変喜ばれた。彼らにすれば日本人がウェールズ語を話すなんて思ってもいないし、与謝野町に来たアベリスツイスの高校生が日本語で「おはようございます」とたどたどしく喋ってくれたらこちらも嬉しいことと同じであろう。

昨年アウエル氏の家族が与謝野町に来られた際、与謝野・アベリスツイス友好協会が歓迎会を開催した。その会場の壁に「Croeso i Yosano（ウェールズ語でようこそ与謝野町の意）」の横断幕が掲げられていたことをアウエル氏は覚えておられとても嬉しかったようだ。「あれは誰が作ってくれたのか？」と尋ねられ、「私です」と答えると両手で握手を求められお礼を言われたのである。

また、フランク・エバンス氏のお墓参りのあと、近くの教会に寄せていただいた際、アウエル氏がウェールズ語の賛美歌を歌って聞かせてくれた。歌声はパイプオルガンの音とともに礼拝堂内に響き渡りとても上手であった。もちろん歌詞の内容は分からない。アウエル氏は自分の歌の上手さを披露したのではなくウェールズ語を私たちに披露したのだ。

ウェールズ語で賛美歌を歌うアウエル氏

職員朝礼でスピーチ

私がウェールズ語を使ったといってもあいさつのみである。それまでアウエル氏とのやり取りで朝会うとおはようという意味のウェールズ語「Boreda（ボレダ）」と言ったり、ありがとう「Diolho（日本語による発音は難しいのだがあえて書くならディオッホ）」、おやすみ「Nosda（ノスダ）」程度である。ある日、ペンウェディグ校の職員朝礼で「あなた達を紹介するので簡単なスピーチを」と言われ、最初いきなり「ボレダ」と言ってスピーチを始めると先生方が大変驚いていた。私のその後のスピーチはアドリブによる英語だが。しかも途中で詰まって糸井先生に助けを求める事態になった。

調子に乗って歓迎レセプションのスピーチでも同様に「ボレダ」と言ってスピーチを始めたのだが、参加者のみなさんは驚いたものの、笑われてしまった。なぜなら夜に「おはよう」と言ったのだから。

与謝野町からの訪問団の余興が終わり締めのスピーチにおいて、糸井先生が最後に「ディ、ディ・・・」

歓迎レセプションでスピーチ

と発音が難しいので言い難くそうに喋ると、参加者の皆さんが現地の正確な発音で「ディオッホ」と助け舟。「ディオッホ」の合唱になった。さすが糸井先生。自分の記念の土産に Diolho と書かれたカップを買い、アウエル氏の奥様リラさんに見せると大変嬉しそうであった。

この交流ではついつい英語で話すことばかりに気をとられているのだが、今後は少しでも良いので是非ウェールズ語も使う事をお勧めする。与謝野町にお越しの際は「Croeso（ようこそ)」と言ってあげよう！

鉱山は身近　～炭坑節～

銀山跡を見学

「私の父は鉱山で働いていた。」アウエル氏の言葉であるが、他にも鉱山で働いた経験をお持ちの関係者がおられた。聞くとウェールズには鉱山がたくさんあったとのこと。私達訪問団もアベリスツイス滞在中に銀山跡の見学に連れて行ってもらった。フランク・エバンス氏も大江山ニッケル鉱山で強制労働の体験をされており、アベリスツイスの人と鉱山は深い関係があった様子である。

歓迎レセプションの余興のために、高校生達は日本語で“ふるさと”を歌うことと、日本の代表的な踊りとして“炭坑節”を披露することにしていたのだが、アベリスツイスと鉱山の深い関係を私自身も知らなかった。そんな理由で、“掘って掘ってまた掘って・・・・”という炭坑節の踊りのしぐさの意味を高校生達が説明し、踊って見せ、一緒に踊ろうと誘い、多くの参加者で炭坑節を踊ったことで、会場全体が盛り上がり、そして大変喜んでいただいた。

日本の伝統的な踊りの紹介として披露したことが、アベリスツイスの人達の心を掴んむことになり、高校生達も大変楽しかったのではないだろうか。あとからキャロラインさんの夫ジェイクさんは「もう一度、教えて欲しい。アベリスツイスのお祭りで踊ってみようと思う。」と言っておられたそうだ。

歓迎レセプションで炭坑節を披露

お湯が！

ウェールズの一般的な生活について、私と糸井先生はホテル泊のため詳しく知る事ができなかったのだが、このホテルで一番困ったことはお風呂であった。バスタブに湯をなみなみとはって、ざぶーんと浸かろうとはもちろん考えておらず、シャワーで体を清潔にできればと思っていた。しかし、蛇口をひねるとお湯と水が 30～40 秒毎に交互に出るではないか。これではゆっくり洗えずしかも寒い。ホテルの管理人に言うと「ボイラーを修理させる」と言って、次の日修理をしたようであるが、その日帰って蛇口をひねると直っていない。糸井先生の部屋は少々違う湯沸システムになっておりシャワーを借りて済ましたのだが、結局、滞在中、安心してゆっくりシャワーを浴びる事ができなかった。日本では絶対ありえない話。

ボイラー

オイルヒーター

なお、ウェールズでの一般的な暖房機器はオイルヒーターのようだ。

ある日、一日のイベントを終えホテルの自分の部屋へ戻り電気のスイッチを入れた途端に「バチッ！」という音とともに電気が点かなくなった。ホテルの管理人に言うと、「一緒に部屋に行く」と言って、私の部屋の扉の上部にある電気設備のふたを開けブレーカーを上げると電気が点くようになった。お礼を言って部屋に入り、今度は物置きの電気のスイッチを入れるとまたもや「バチッ！」という音。ブレーカーを上げればまた直るだろうと思い、部屋を出て先ほど管理人がしたのと同じように、今度は自分で下がっているブレーカーのスイッチを上げるが直らない。ホテルの管理人に言い見て貰うと「ああ、これはダメだ。明日直させる。」と言って管理人室に帰っていった。日本ではありえない話。ふと気が付くとルームキーを閉じ込めた！

どの出来事もたいした影響は無いし、誰かに文句を言いたい訳ではない。どちらかと言うとこの体験を楽しく感じていたし、日本との違いも体験できた。

ちなみに電気のコンセントは三つ又でオン/オフのスイッチが付いていた。電圧が日本と違うため変圧器がないと日本製品を使うことが出来ない。持参した変圧器は、毎晩デジカメ、ビデオカメラ、携帯電話（日本時間確認用）のタコ足充電で大活躍した。

電気コンセント

変圧器にたこ足で充電

５．アベリスツイスの人達の交流にかける思い

今後も頼むよ

滞在中にアベリスツイス・与謝野友好協会主催の歓迎レセプションが開催され、高校生達はそこで英語によりスピーチをすることになっている。このことは日本を出発する前から高校生達に伝えておいたので、充分準備をしているだろうと思っていたのだが、全員まだ出来ていなかった。歓迎レセプション開催の数日前のことである。「ホームステイ先で考えてきたので、通訳の糸井先生に見て貰いたい。」と言い出し、即席の英語レッスンがアベリスツイスで始まった。レセプションでのスピーチが心配である。

歓迎レセプション会場に集まる関係者

歓迎レセプションには、アベリスツイス副町長のトレバー氏をはじめ友好協会のメンバー、ホストファミリー、昨年与謝野町を訪れた高校生達等の約 50 名が出席された。我々は公式行事ということで正装、高校生達は制服を準備していたのだが、原田先生が浴衣を 4 着持っているとのことで、急遽女性陣は浴衣を着て出席することになった。浴衣姿の高校生がレセプション会場に入ると、それまでめいめいに雑談をしていた出席者の目が一斉に彼女達に。そして大きな拍手と口笛、カメラのフラッシュ攻撃で会場は一気に大興奮となったのである。そしてそのまま歓迎レセプションが始まった。

イギリスでのこのような会では、最初に食事を取りながら懇談をする。そのあと挨拶、余興の順で進められる。私は適当に食事を済ませ、関係者に近づくことにした。これは 4 年前の訪問の際に勝手が分からず、英語も分からないこともあって余り交流が進まなかった苦い経験をしたからだ。今回は既に知っている方々やこれまでの交流の話題も持ちあわせているので、英単語の羅列とジェスチャーで数人と会話。「○○さんを覚えているよ。」「娘が日本にいたことがあるんだ。」「日本に行ったことがある。空港名は何だったかなあ。」という内容であったのだが、私にとっては一緒に話をしていただいただけで“交流した！”気分。一番嬉しかったのは、昨年与謝野町でアベリスツイスの高校生達を受入れたお礼と、今後も頼むよと言われたことだ。この言葉は、今後の交流事業継続に対する期待の表明として強く印象に残っている。

バイロン夫妻

ところで、高校生達のスピーチだが、それぞれ特徴があって大変良かった（ようだ。）私が想像していたより全員長い時間、一人ずつ順番に考えてきた英語で自

英語でスピーチする高校生

己紹介をし、それぞれスピーチが終わるたびに拍手を受け、そして笑いもたくさん誘った。ある高校生が長いスピーチをすると、次の高校生が「私は彼女のように長いスピーチはできません。」とアドリブで言ったり、「私はメモ無しでしかも英語でスピーチをします。」とこれもアドリブ。英語のレベルが高いどうこうではなく、それぞれ個性あるスピーチで会場の雰囲気を盛り上げた事に大変驚いたし、「やるな高校生」とここでも感じ入った。

フランク・エバンス氏の志

「原子爆弾は素晴らしい兵器」日本の敗戦により強制労働から解放されウェールズに戻ったフランク・エバンス氏は、このように語ったとのこと。大江山ニッケル鉱山での強制労働は過酷で、捕虜収容所での待遇は最悪であったため、「原子爆弾が無ければ戦争は続いており自分はその年の冬を越せていなかった」と振り返られている。日本に対する憎悪も相当なものであったようで、近所の人が日本製の車を買おうものならその人を罵倒したそうだ。そんな人が日本の加悦から帰ってくるとコロッと変わって日本びいきになり、そして両国の平和交流に尽力することになったとのこと。この話は糸井先生から伺った話で、エバンスさんを知るおばあちゃんが話されたようだ。そのおばあちゃんは、「戦争を終わらせるためであれば、二つも原子爆弾を落とす必要はなかったはず。」と言われたそうだ。以上のようなエピソードもあったのだが、エバンス氏は両国平和を志し、加悦との交流を始められたのである。

エバンス氏の知人に話をする糸井先生

歓迎レセプションでは、友好協会会長のアウエル氏、アベリスツイス副町長トレバー氏、ケレディギオン郡議員のデービス氏があいさつをされた。なかでもデービス氏のあいさつにアベリスツイスの方々の思いが込められていたのではないかと思った。デービス氏は、「フランク・エバンス氏の志と、それが目の前に実現されていること。ここにいる高校生達は両国の架け橋であり、ここでの経験を広めることが大切である。」と述べている。

スピーチするデービス氏

私はこのスピーチを聞いて、フランク・エバンス氏の志を引き継ぎ平和な世界の構築を願うアベリスツイスの方々の存在をあらためて再確認をしたのである。相手あっての交流である。このスピーチだけではないのだが、相手も同じ思いを持ち続けていることを今年も確認できたことは、最大の成果であったと思っている。

フランク・エバンス氏の功績は非常に大きい。

歓迎レセプション参加者

墓前に捧げる詞

我々は、フランク・エバンス氏の墓へ参った。墓参りは毎回必ず組んでいただくイベントである。その日の朝、ホテルに迎えに来てくれたアウエル氏に、案内していただいた店で花束を購入してから、フランク・エバンス氏の眠るお墓に向かった。前述したとおりフランク・エバンス氏の功績はとても大きく、与謝野町を代表して訪問している我々も氏に対して敬意を表することはとても大事なことだ。

Talybont のお墓に行くと既に高校生達とホストファミリーが待っていた。与謝野町を代表して花束を捧げるつもりであったが、ほとんどの高校生達がそれぞれ花束を持っていた。ホストファミリーが準備してくれたのであろうが、ホストファミリーのフランク・エバンス氏に対する思いに触れた出来事のひとつである。

フランクエバンス氏の墓前で平和を誓う

墓前では与謝野の高校生達に整列してもらい、事前に準備していた「墓前に捧げる詞」を私が日本語で読み上げた。内容は氏への感謝と平和への誓いである。その後、顕花、黙祷と続けた。これらの儀式の間、アウエル氏やホストファミリーのみなさんは沈黙で見守っていただいていたので、我々が捧げた詞を糸井先生からみなさんへ英語で紹介していただき、そして「うん、うん」とうなずいていただいた。アウエル氏からも「ありがとう」と一言頂戴した。訪問団が墓前でフランク・エバンス氏に感謝や平和の誓いをする事は今後も続けるべきである。

交流のシンボル　～桜と椿～

加悦町から送られた桜－タウンホール前

「加悦町の、そして日本の桜の木を植える事によって、かつての敵を許し、今後、日本と英国との平和のシンボルとして永遠に守り育てる」これは、昭和 62 年にアベリスツイスの関係者がタウンホール前に桜の木を植樹された際、フランク・エバンス氏のメッセージである。

桜の説明版

このメッセージどおり、この桜の木は平和のシンボルであり、与謝野町とアベリスツイス交流のシンボルでもある。予定に組み込まれていなかったのだが、ケレディギオン博物館見学の帰りに、全員でこの桜の木を見学に行くことにした。

桜の木の根元に掲げてある説明版には“PRESENTED BY MAYOR OF KAY-CHO JAPAN”と刻まれている。4 年前、私がここに来た時はこの説明版が割れていたのだが、きちん直されていた。桜の木の全長は 5m 以上もあろうか。

ペングライス校校門

展示されている日本の品

もうひとつ予定に組み込まれてはいなかったのだが、お願いしてペングライス校へ連れて行ってもらった。前回平成 18 年（2006 年）に太田貴美与謝野町長が団長としてアベリスツイスを訪問された際、記念に町の木“椿”を植樹されたので、その場所と椿の生育状態を確認したかったからである。

ペングライス校は、アベリスツイスにあるもうひとつの中等教育学校で英語系の学校である。在校生徒数は千人以上。ペンウェディグ校よりも規模が大きいのだ。

キャロライン・グッドバンドさん。彼女は平成 15 年（2003 年）に引率者としてアベリスツイスの高校生達と加悦を訪れており、その 2 年後の平成 17 年（2005 年）にも再度高校生達と加悦を訪れている。2 回目は夫のジェイクさんも一緒であった。私は、彼女がペングライス校の教師であることを知っていたので、彼女に学校へ連れて行ってもらうようにお願いをした。

椿は、学校の中庭のような場所に植樹されており、当たり前だが事前に見ていた写真どおりである。椿は大きくなっていた。キャロラインさんからペングライス校紹介パンフレットが配布された中に 2 年前の植樹式写真が掲載されていることを教えてもらった。ペングライス校として与謝野町との交流を意識していただいており、この椿の木も両町の交流のシンボルとして今後も育てていただければ何よりである。

植樹された椿

すべて友好協会

この高校生交流事業においてアベリスツイス側の主体は友好協会である。したがって滞在中は、会長のアウエル氏をはじめ友好協会会員の方々にお世話になった。

アウエル氏宅にて

アウエル氏は、これまでからこの交流事業のすべてを段取りしていただいた方であり、また訪問者の世話もされるまさに中心人物で、彼がいないとこの交流はどうなってしまうのか心配なほどである。

今年はキャロライン夫妻に最もお世話になった。滞在延べ日数 9 日間中、駅への出迎え、夕食への自宅招待、私達訪問団の案内などで彼女の顔を見なかった日はわずか 2 日のみであって、これらは仕事ではなくすべて奉仕である。本当に頭の下がる思いであった。

彼女が加悦訪問経験のあることは既に述べたとおりで、実は私が 4 年前アベリスツイスを訪れた際に自宅へ夕食の招待を受けたし、彼女が加悦を訪れた際にはお返しに私の自宅に夕食の招待をした。そして今回また彼女の自宅に招待された。お土産の交換をしたりクリスマスカードをいただいたこともある。これらのお付き合いは私とキャロライン夫妻との個人的なものとも言えるが、交流とは両町の複数の人間によるこのような付き合いの集合体であると思っている。

その他にもたくさんの方々にお世話になったのだが、行政ではなく任意団体、一市民が交流事業の主体となって活動されている事に対して、そのご苦労を想像するとともに、本当に感謝の思いでいっぱいである。さらにフランク・エバンス氏の志を受け継いで行く姿勢に対して尊敬し、見習うべきとの思いを新たにしたところである。

キャロライン氏宅にて

選考委員

この交流は、高校生のいる家庭へのホームステイにより行うため、毎回、訪問団員とホストスチューデントのマッチングを行う必要があるのだが、交流する高校生をどのようにして選考するのかをアウエル氏に伺ってみた。

方法はこうだ。高校生にエッセイを書いてもらい、アベリスツイス友好協会の選考委員でエッセイの内容を見てダメな人を落としていく。アウエル氏も選考委員なのだが今回は自分の娘が選考の対象になっているため選考委員にはなっていない。

アベリスツイスの方でもこの交流に対する重要性を十分認識されており、軽い気持ちの興味本位だけの高校生ではダメだと言うことなのであろう。

別れと誓い

再会を誓う高校生

あっという間の滞在が終わり、その時がやってきた。アベリスツイス駅での別れはバーミンガム空港発飛行機の都合により朝 7 時集合であったが、早朝にもかかわらず大勢の関係者が見送りに集まってくれた。

1 週間前の不安な様子であった高校生達は、滞在中のたくさんの経験によりホストファミリーと家族のような関係を構築することができたのであろう。ホストファミリーとの別れを惜しみその目には涙が見える。ホストファミリーの目にも涙が。そしてお互い再開を誓っている。

アベリスツイスの高校生の一人が私に近づいてきて「来年、必ず与謝野に行くから！」と言う。「待っているよ！」と私も返す。来年が楽しみである。

アベリスツイス駅で別れ

６．初めてのアクシデント

アベリスツイスに別れを告げ、私達を乗せた列車はバーミンガムへ向かったが、途中列車故障のため 15 分遅れる。ここまですべてが順調に進みあとは帰国するのみの状況で、初めての少しのアクシデント。しかし、バーミンガム発の飛行機には十分間に合うため何の心配もないし、実際バーミンガム空港にはフライトの 1 時間 30 分前に到着した。

空港で手続きを済ませ、スーツケースを預け、出発ゲートへ進む。

しかし、出発ゲートに到着すると、いるはずの飛行機がいない。なんと私達の乗る飛行機は、バーミンガムからの折り返し便で、その飛行機がまだバーミンガムに到着していないのだ。飛行機がバーミンガムに到着したのはフライト定刻の 30 分前であったため、2 時間 10 分遅れでバーミンガム空港を出発しドバイ空港へ向かったのだが、この段階では、「まだ大丈夫。間に合う。」と思っていた。いよいよドバイ空港に着陸するということで時計を確認すると乗り継ぎに 30 分しかない！しかし、この段階においても、同じエミュレーツ航空便への乗換えで、この便がかなり遅れていることも航空会社は分かっているはず。ギリギリだが間に合うと思っていたが甘かった。出発ゲートに既に機体は無く、関西国際空港へ向けてフライトしてしまっていたのだ。この時、時刻は午前 2 時 50 分。

糸井先生にお世話になりエミュレーツ航空のデスクで対応していただいた結果、次の出発便は 24 時間後で航空会社が手配するホテルで 1 泊しなければならなくなったのだが、これを聞いた高校生達の反応は、「え～っ、帰りた～い」と「ドバイで 1 泊できるなんてラッキー」。このような事情で予定より 24 時間遅れて帰国することになったのである。この交流史上初めての最悪のアクシデントであった。今回の全行程は 11 日間の予定である。しかしこのアクシデントで 12 日間となった。

宿泊したホテル

道路標識はアラビア語

ドバイでの 1 日は、アベリスツイスとの交流に直接関係ないのだが、簡単に報告しておこう。

私達は中東のドバイの状況について全く情報を持ち合わせていないし、時差や深夜のドタバタによる疲れもあったことから基本的にはホテルで休息することとし、単独での自由行動はしないことにした。とは言うもののせっかくドバイ滞在の機会を得たので、全員で専用シャトルバスを利用してシティセンターに短時間だけ出掛け、バス車内から沿道の街並みを見学したり、シティセンターで一般市民の買い物の様子を見ることができたのだ。

ここ中東のオイルマネーで急速に発展したドバイの

雰囲気（景色や食事等）を体験できたことは高校生達も大変楽しかった様子であったし、予定外の出来事ではあったものの、アクシデントとは思えない高校生達の落ち着きぶりに感心し、アベリスツイスで海外というものに多少慣れたかなと感じたのである。

そして 24 時間後、私達を乗せてドバイ空港を飛び立った飛行機は、無事、関西国際空港に到着し、全員が元気で与謝野町に帰ったのである。

ホテル前の大通り

シティセンター

建設中の世界一高いビル

市内のやしの木

民族衣装を着た女性達

世界で最も美しい日没

７．帰国

報告準備

帰国したからといって、この事業が終了したわけではない。高校生達は、今回のアベリスツイス訪問の報告をする重要な任務が残っている。一つは報告会、一つは研修報告書の作成である。

私は、この報告会における報告方法として、高校生一人ひとりからアベリスツイス訪問の報告をしてもらい、さらに、例年にはないが座談会形式による報告を行うことを提案し、通訳の糸井先生の参加のもと私がコーディネーターをすることになった。併せて事後研修において事後アンケートの記入、報告会までに研修報告書を作成するよう要請した。このような提案をした理由は、過去の報告会における高校生一人ひとりからの報告内容に物足りなさを感じていたためで、もっと高校生自身がこの訪問により得た多くのことを自分の言葉でたくさん喋って欲しいと考えたからである。そして、そのためにはその場の思いつきの言葉ではなく、きちんと頭で整理できていることを喋ってもらうため、事前に研修報告書という形でまとめておいてもらい、私自身もおおよその高校生

達の思いを知っておくため事後アンケートを記入してもらうことにしたのである。

もう一点気になっていた事は、この交流事業は旧加悦町で実施されていた事業であって、未だこの交流事業のいきさつや目的、事業実施の事実すら知っておられない方が旧岩滝町と旧野田川町の方に多い（もちろん旧加悦町の方でもご存じない方はいる。）ことで、その理解を得ていただく PR の場として報告会で何かできないかと思ったのだ。これについては、2008 年訪問の報告会という趣旨を考え、私が引率者報告の中で触れる事と、座談会のコーディネーターとして進行する中で高校生達の言葉から引き出す程度にすることとした。

さらに、私は撮影した 1,300 枚の写真と糸井先生や高校生達が撮影した写真の整理、持ち帰ってきた多数の各種パンフレット、時刻表、チケットの整理、アベリスツイスの街を紹介する四ツ切ワイド写真集の作成、ビデオ映像の編集等を、通常の役場業務と平行して行うという超多忙な毎日を過ごし、12 月 19 日（金）報告会を迎えたのである。

報告会

研修報告会

報告会は与謝野町の町長、副町長、教育長をはじめ、ふるさと人づくり事業推進委員会委員、与謝野・アベリスツイス友好協会会長及び会員、並びにホストファミリーのみなさん等約 30 名を前にして、開催された。

事前に考えていた報告会の狙いについて、どうであったかと言うと、想像以上に高校生達は立派な報告ができたというのが、私の正直な感想である。一人ひとりによる訪問報告で高校生達は制限時間 5 分を最大限活かして自分の言葉で様々な事柄について個性的な報告をしたため、私が次の座談会で話題として考えていた内容がほとんど報告されてしまった。これにより少々焦った私は、事前に考えていた座談会の進行を無視してほとんどアドリブになってしまったほどである。糸井先生のお話やフォローも私を非常に助けるものとなり、何とかほぼ報告会の目的を達成でき無事終了した。

座談会

なお、報告会の他、近々に撮影したビデオ映像の与謝野町有線テレビでの放送及び研修報告書の発刊により、今回の報告を多くの方にさせていただく予定としている。

８．最後に

6 人の高校生達の研修報告書を読み終わった。それぞれ個性的で内容も様々。点数を付ける事は出来ないし、付ける必要もない。ただ出来るだけ多くの方に読んでいただき今回のアベリスツイス交流事業で高校生達が感じた事を知っていただくことを願う。そして一人でも多くの方がこの事業に興味をもっていただければ幸いである。

さて、私自身の報告書の作成に取り掛かったのだが、この報告書を作成していて私自身何かしっくりこなかった。報告書を作成し始めてからすでに 1 ヶ月が経とうとしている。そしてもう一度頭の中を整理して気が付いたことがある。

それは、私が複数の立場で今年の派遣事業に携わっていたことである。列挙すると（1）与謝野町の国際交流担当者（2）派遣団の引率者（3）一人のアベリスツイス訪問者（4）与謝野・アベリスツイス友好協会事務局（5）与謝野町ふるさと人づくり事業担当者、という立場である。

しっくりこなかったのは、複数の立場であれもこれもとたくさんのことを報告しようとし過ぎていたのではないかと思う。高校生達は実に率直に自身の感想を述べている。帰国後の忙しさから余り振り返ることができなかったが、思い直せば私自身この事業の準備も含めて非常に楽しかったのである。そう言えばキャロラインがこんなことを言っていた。「タカ（私の名前 ” たかよし “ を省略してこのように呼んでもらっている）が再びアベリスツイスに来るなんて想像もしていなかったわ。私も 2 回加悦に行ったことを知っているわね。1 回目は右も左も分からないうちに帰国したけれど、2 回目はおおよそのことは分かっていたから余裕を持って滞在を楽しむことができたわ。今回あなたもそうでしょ？」まさにその通りなのである。私は滞在を楽しんだのである。高校生達と同様にアベリスツイスの人達と交流し、ウェールズの文化を知り、日本の文化を伝える一人の親善大使として訪問していたのだと思う。

（町長から預かったメッセージとは別に）私は、歓迎レセプションでの訪問団代表としてのスピーチにおいて、この交流の機会を作ってくれたフランク・エバンス氏に感謝の意を述べ、彼の体験を伝え平和の大切さを多くの方に知っていただく努力を今後もしていくことを述べた。これは町職員としてではなく個人として述べたものであって、聞いていただいた方々もそのように理解したはずである。（アベリスツイスの方にとって私が町職員かどうかは関係ない。）本交流事業は、高校生のための国際交流のみにとどまらず、引率職員も高校生と同じく交流事業の目的を達成する責を追うべきというのが私の考え方である。

この相互交流事業の目的は「世界平和の実現」と理解している。今年は与謝野町高校生のアベリスツイス訪問であったが、来年はこの逆でアベリスツイスの高校生を与謝野町にお迎えすることになるであろう。このようにお互いの国が交流し相互に相手を理解することが国際理解であり、戦争をしないための第一歩ではないだろうか。自国の都合

や利益のみを優先したり、主張や思想を他国に押し付けるのではなく、相手国の文化・思想等を理解しようとする姿勢が必要であって、国の構成員である国民がそのような意識でないと政治もそのようにならない。国際理解が出来る人材を育成することが強いては世界平和の実現に結びつくという考え方で、その一つの方法としてこの交流事業があると思っている。

双方に言える事だが交流事業を担う人材がいなければ相互派遣は成り立たないのであって、「細く長く」交流できるよう今後も微力ながらお手伝いさせていただこうと心を新たにした。そして、フランク・エバンス氏の著書「大江山の点呼」の最終章で記述されている「桜の平和メッセージ」を再度胸に刻んだ。

Sakura Peace Message By Frank Evans
Consider our blossoms which are beautiful in life and death.
Never again let us and human beings die in an ugly holocaust but instead
allow us all to live and die naturally in perfect peace for ever more.
咲いているときも、散った後も美しい桜。二度と再び人間が、無残に命を失うことのないように。そして全ての人間が平和のうちに生をまっとうできますように